
魔法使いのテキトーな弟子

× ×

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いのテキトーな弟子

〔テヅ〕
N 7 1 6 1 N

【作者名】

×

【めいじ】

世の中に棲息する、人外よろしくな魔法使いの弟子にさせられて
しまった不幸な少年Eのお話である。 A「イヤ

えええ———つ———」 C「助けてええええええ———」

Dがどうなつたか聞かない方がいいだろう・・・・・

まあ
A

諸事情により編集中

〇話・お話は唐突に

他人の気持ちが分からぬ
とはよく言ったもので自分のことが分からぬのに他者を理解出来
るわけもなく、他者との友情とか愛情とかはその場の空氣やノリと
かで発生するものなのではないかと自分勝手に考察してみるのはい
いものの、何が何だか分からなくなつて最終的に明日の献立とか考
えるのが僕なんだと理解したのはつい先日である。

まあ自分を理解出来たといつのは停滞している僕の中では一步成長
したということであろう。

つまり前の僕とは幾段も違う僕が誕生したといつわ
けで、まあようは何が言いたいかと言えば……。

「死ね、爺つ……」

「クツクク！お前さんにやられる程、僕は甘くはないわ！」

「斬つ……」

通算3582回戦の敗北である。

もつともあんな生身でガンム破壊してやんよ!とか言い出しそうな人外爺さんと戦闘で勝てるとは微塵も思ってはいないのだが、殴りかからずにはいられないのだ。

何が「ドラゴンの丸焼きが食べたい」だ。馬鹿かこの爺、そんなもんの調理方法なんぞ知らねえし持つてこられても困るけどな

とりあえずこのクソジジイキシュア・ゼルレッチ・シユバインオーグはムカつくのだ。

よくは知らないが第2魔法の使い手とか言われてて偉そうに宝石で出来た剣を振り回して至る所を引っ搔き回す迷惑極まりない爺さんである。更に吸血鬼らしいので正直太陽光で塵になつて滅されて欲しい。

あともう一人殴りたい奴がいて・・・・

「ちょっと炭酸抜きの冷たいコークはまだ〜?」

「黒い砂糖水でも飲んでろ、青女！」

「爆！」

「ああ～わつこつ口きくと・・・・・・・・・・瀆すわよ？」

「やつてから言つてから言つたじや・・・・ねえ・・・・です」

この女もまた魔法使いらしく、じいつは第5魔法の使い手のこと。世界には魔法使いは5人しかいらないらしいのだが何やら夢がない話である魔術とか魔法とかひとつくりでよくないかと言つて爆笑されたのはつい昨日の話だが・・・・でこの女、蒼崎青子。通称、人間波砲であるこの前かめはめ波みたいなのを撃たれたので女版孫空と言えなくもない移動型破壊拡散人間である。

この前ピサの斜塔を爆笑しながら倒していたのは今も夢に出てくる。・・・・・笑うしかなかつた。

この女のムカつくといひはどんな結果であれ「まついいか！」で済まさうとするつざつたいポジティブシンキングだ。

ピサの斜塔を倒塔にしておいて、いいわけがあるのでどうか？いやどう考へても普通にないと思う僕は間違つていいのだろうか？ 爺もそれを聞いて爆笑してたし・・・・・僕の常識が間違つていいのか甚だ疑問である。

まああともう一人腹の立つやつはいるのだが、そいつは殴りたいと
いう程ムカつきはしない。ただ相手をしなければいいだけだからま
あ住んでる所が住んでる所なので中々遭遇することがないので正直
どうでもいい。

地下8000mとかアホすぎる。
確かあいつも魔法使いだった気がしたが話してるとイライラするの
で詳しく話したことはないから知らん。

まあどうでもいい、存在全てがどうでもいい。

ああ僕？

僕は頭のおかしい人外魔法使い達の弟子、空山 海人である。ちな
みに名前は爺共が嫌がらせ半分でつけられた山海空とかテキトー名
前もいいところだと当初はツツコミ忘れたのは僕としては痛恨のミ
スであるつ。

あそんなこんなで魔法使いのトキターな弟子始まります。

《続く》

1話・理由があり原因があり結果がある

我輩は人間である。

名前はもう……ない。

田を覚ますと何もなかつた。

他意はなく言葉のままである。

自分は・・・・・僕／私／俺は誰だ？

名前を忘れ、家族を無くし感情を無くし記憶も無くした・・・・・。
既に2週間経つており何するわけでもなく、ただ外を眺めていた。
軽口程度ならきけるようになつたのだが無表情なので「冗談だと受け取られなかつたようだ。

事故に遭い両親を亡くして、その後遺症で全てを忘れてしまった
らしく生活に必要な記憶は忘れてはいないので日常生活を送る上で

は問題はないが、感情を無くしてしまったのが可哀相だと病室の前を通る看護師たちがヒソヒソと話している。

別にあんたたちに「カワイイソカワイイソなのです」とか言われてもなんらときめかないので、変な同情は止めて欲しいものだ。

まあ正直どうでもよかつたが・・・

無くしたものに想いを寄せても帰つてはこないのだ、それが自分の記憶や感情であろうとも・・・・虚無感とか恐怖感はなく、ただ寂寥感があつた。

僕／俺／私は何をすればいいのかと・・・

当たり前の話だが7歳の子供にすることなどなく、ましてや記憶や感情、家族を亡くした幼い少年など何かをせねばならないといふ寂寥感を覚えるものではない。

だが僕／俺／私にはあつた。
あつてしまつたのだ。

ここについてはならないはず。

何かを為せ、何かを果たせ、何かを生め・・・そんな強迫観念のよつなものに押し潰されそうになり、僕／私／俺は入院していた病院を勢いのままに飛び出してしまう。

当たり前のように行く先などなく、田舎も曖昧なまま病院着のまま肌寒い雪が降る公園のブランコに座り、一人ぼんやりと空を見上げながら佇んでいた。

強迫観念じみた寂寥感に押されながらもすることなどなくただ呆然と座つていると・・・・公園の中で自分と同い年ぐらいの女の子を囮んで虐めている男の子たちがいる。

4人で女の子を囮み、ランドセルを取り上げ蹴飛ばしたり投げて回したりして女の子をからかっている。

やられた女の子は必死に取り返そうとしているが、年齢がまだ幼いため男女による体格の差はないが、人数が違うせいか結果として振り回される形となつていた。

幼年期によくある好きな女の子を虐めちゃうツインテレミみたいな奴なのだろうかとぼんやりとした頭で方向性のズレたことを考えながら虐められている少女を眺める。

今の僕なら関わらずに見捨てたであろうが、この時の僕／私／俺は寂寥感に苛まれ、あんな少女の様を見たら何かをせずにはいられずつい手を出してしまった。

現代のあれくらいの少年少女に同世代のガキンチョが優しく注意を呼びかけても、耳を傾け行動を止めることがないと捻くれた思考でそう考え

そちら辺に落ちていたバケツを拾い、その中に水道で水を貯めて女の子を虐めていた男の子たちに無言でかける。

「えつ？」

するといきなり水をかけられた少年たちは最初は何が起きたか理解出来ず田を見開き驚いていたが、ようやく何をされたか気づき、怒りをあらわにこちらを睨みながら怒鳴りつけてきた。

「何するんだよー？」

そんな少年たちに久しぶりに食べること以外に使う口を開いて、感情を込めずに聞こえるぐらいの小さな声でボソボソと答えを返す。

「・・・・・バケツで水をかけた」

「そんなことを聞いてるんじゃない！――」

その答えを聞いたずぶ濡れの少年たちは案の定、怒り狂い僕／私／俺に殴りかかってきたが

入院生活の長い模範的なモヤシっ子である僕／私／俺はどうすることも出来なかつた・・・いや何をしていいか殴られるまで思い出せなかつた。

「どうだつ！――

殴られた瞬間に頭の中でバラバラだつた歯車が噛み合ひつよつた、パズルピースが嵌まつたようなそんな音がした。

僕／俺を殴つた少年たちは勝ち誇り、偉そうに胸を張つて自分たちの数による優位性を誇示して、テレビに出てくる‘正義の味方’のようにカッコつけていたが、僕／俺はそれどころではなく・・・・・・

・・・思い出したのだ。

「・・・・・これが、痛い、か――」

「はあ？何言つてゐんだお前？」

僕／俺の呟きを聞き、男の子たちは殴られた僕の行動が自分たちの思っていたものとは違つりしく、不思議そうに首を傾げて僕／俺の不可思議な呟きを嘲笑い、頭才力カシイんじゃないのかコイツと言つような顔を向けてくるが、その間に僕／俺は思い出していく・・・少しずつ壊死している感情といつものがどうにものかといふことを・・・

「‘痛い’は・・・嫌いだ。だけど・・・‘痛い’は・・・

・・・いらつへ

思い出したままに‘怒り’を表現しようと田の前のひょうびいに場所にいた少年を殴りつける。

「がつ！？」

「何してるんだよー？」

殴られた少年は痛みで呻き声をあげ、隣にいた少年が仲間が殴られたといつに気づき僕／俺に突つ掛かつてくると同時に

「やつちまえー！」

リーダーらしき少年が回りの少年たちに僕／俺を殴るよつ命令した。

僕／俺はそれに対抗するべき無我夢中で腕を振るう・・・・・

けれど所詮僕／俺はただの非力なモヤシっ子少年で、殴りつけたはいいがその後一方的にボコボコにされた。

転がされ縦横無尽に襲い掛かる少年たちの蹴りを亀のように丸くなり、堪えつづける。

たまに少年の足に噛み付いたり抵抗したものの効果は薄く・・・ズタボロにされた。

何分か経ち、少年たちは僕／俺をいたぶり飽きたのか、虐められていた女の子に何もせず、そのまま帰つていいくのを身体中に痣が出来た状態で見送る。

そして何故か、ボコボコになった僕／俺の横には先程虐められた女の子がボロボロになつた僕／俺を見て、女の子座りで泣きじ

やぐつながら何かを語りこむのを聞いた。

よく聞き取れなかつたがびりせり繰り返し謝つてこなみつだつたので、痛みであげりい手をあげ、女の子の艶やかな黒髪を撫でる。

「謝らなぐていい・・・謝られたいの気持ちは消えてしまつ

全身を襲つ痛みを押し殺しながら少女を撫でてそう呟いた。

先程まで僕の心を苛んでいた寂寥感は消え、何やら清々しい気持ちが心の中を渦巻いていた・・・・・からっぽでも役に立つたと思えたから。

「・・・・・びりじて・・・・・びりじて助けたの?私が悪かったの?・・・

・・・

女の子は泣きながら自分が虐められた理由を語り始めた。

何やうせうといつて少年たちにぶつかつてしまい、ああいう風になつたらしく、それで自分が悪いのにびうじて助けたのかを尋ねてくるので、殴られて腫れたせいか動かじづらに口を歪ませ笑いな

がら

「あれが、正しい、」ことで君が、悪、で彼らが、正義、の味方を氣取るなら僕／俺は、悪、の味方でいい。あんなつまらない、正義、なんかなくなつてしまえ」

「…………。」

そんな僕／俺の言葉を聞いた女の子は驚きながらもハンカチを濡らして僕／俺の殴られ騒られたせいで汚れた部分の汚れを拭つてくれる。

「『残酷で理不尽で、生きている人間は醜悪ばかりのそれでもどうしようもなく時折優しく美しいこの世界』か・・・・・本当にどうじょうもないな」

「えつ？」

小さな声で呟いたつもつだつたがどうやら女の子に聞かれてしきつたみたいだ。

「いや、悪、の味方も悪くないと思つただけさ」

微笑みながら女の子にそう伝えると女の子は少し驚いたように口を見開いた後微笑み返してくれる。

それが嬉しくて笑みを深めようとした瞬間

「クックク！、悪、の味方とはよく言つたもんじゃな！」

後ろから紳士然とした80代ぐらいの老人に笑われた。

老人は笑いながら僕／俺の横まで来て、雪降るこんな寒空の中でも暖かい手で僕／俺の頭を撫でながら

「どうだ、小僧。儂について来ぬか？」

新しい玩具を見つけた子供のような笑みを浮かべて、空いた手を僕／俺に向かつて差し出しそう提案してきた。

僕は差し出されたその手を見つめ、頬に伝わる暖かい温もりを感じながら思考して、結局この場にいてもすることもなかつたので痛

みを押し殺しながら肯定の返事をする。

「ああ

「クックククー！重畳重畳！儂の名前はキシュア・ゼルレッチ・シユバインオーグ！小僧、儂は魔法使いじゃ！」

「そうなのか？」

曖昧に頷きながら、差し出された暖かい手を握った・・・・
僕はこの後ずっと死ぬまで、この差し出された暖かい手を忘れるこ
とはなかつた。

思いだせば目の前の老人、キシュア・ゼルレッチ・シユバインオ
ーグは自分は魔法使いだと言い出したのだが、この時の僕／俺は異
常に對する警戒心を失っていたので何も疑わずに爺さんの言葉を信
じて、このヘンテコな爺さんに着いていくことにした。

何故か呆然としている女の子に手を振り別れを告げ爺さんの後に

続く。

……………やつこえは女子の名前を聞き忘れたな。

汚れてしまつている女子の手のハンカチをポケットにしまってながら
そんなことを考えてこると

「小僧、お前わんの名前は？」

爺ちゃんに話しかけられ名前を尋ねられたのだが・・・・・・

「名前は・・・・・・もつない」

名前など覚えていぬはずもなく、感情を込めずに無機質な声でそ
う答えると爺ちゃんは笑みを浮かべて

「やうか・・・なら後でつけてやう」

楽しそうにそつぽ案してきたのでテキトーアソシしておこた。

「ああ好きにしてくれ

これが魔法使いキシア・ゼルレッチ・シユバインオーグと僕の
出会いだった。

《続く》

2. 話・理由とか理由とかは理不_可の前では成り立たない

雪が深々と降る町の中、とてあえず暖を取ろうと爺さんに言われ、近くの喫茶店にいるのだが・・・・病院着でこいつこいつ所にいていいのだろうか？

自身の常識に自信が持てないので前に座る爺さんキシュア・ゼルレッチ・シコバインオーグに確認の視線を送ったのだが何も気にせず珈琲を飲んでいるので問題はないのだろうと推測する。

もしくはただ単にアイコンタクトの意味が分かつてないだけかもしれないが、そこは割愛しておこう。

「好きなものを頼め」

「・・・・水で」

そつは言われたものの何を頼んでいいかよく分からぬ。

メニューを見てどうこう食べ物かは知っているのだが、最近病院でお世話になつてたのは可能性に満ち溢れた素敵フードの流動食だったので、自分の好物や苦手な物が分からない中で下手に注文するのにはまずいと思ったのだが・・・・・

「小僧！子供は遠慮するもんじゃない！ガンガン頼めっ！」

じつやら爺さん的には氣に入らなかつたらしいのでどうあえず無難にアップルティーとアップルパイを頼んでおいた・・・・・小麦か林檎アレルギーじゃないことを祈りつ。

席につき身体も温まつたので、漸く対面に座る爺さんの顔をまともに見ることが出来たのだが白髪で目が赤い好々とした爺さんだつた・・・・・目が赤いなんていうのは普通のことだつただろうか？

こりどもまた自身の常識の欠如に咎まられることになるとは

爺さんの観察にも飽きて、ぼつと窓の外を眺めていると不意に硝子に写る自分が気になり、何の変哲もない自分の顔を見つめる。

初めて見る自分の顔はなんのことばなこどりにでもこなつた平凡な少年の顔だつた。

女の子が一同に振り向くような素敵フェイスではないので、何やら肩透かしを喰らつた気分になつたのだが

まあそれも僕／俺の個性だと納得して、頬についていた大きなガーゼを外し、ガーゼの下にあるであろう怪我を硝子越しに見ると・・・

・・・・何やら気持ち悪いことになつていた。

入れ墨のような黒い筋が左頬を不規則に走り、それが首まで達していたのである。

・・・・・気持ち悪い。

見ているだけで不快感を催す紋様だったので、どうやらこれを隠すために痛くもないのに首まで包帯がしてあつたみたいだな。

どうやら事故に遭う前の僕／俺はこの歳・・・・・だいたい7歳ぐらいにして裏の世界に憧れを抱いていたようだ。

もしくは虐待かもしれないが、今は亡き両親をおとしめて何ら意味はない

「へんなもんじやないと自嘲しながらも絆創膏を貼り直し、無言で
じゅりの様子を伺っていた爺さんに向き直る。

「どうしたんだ？」

「こやお前さんの頬にあつたその入れ墨」

「これがどうしたのか？」

頬のガーゼを指しながら爺さんに尋ねると爺さんは顔を寄せ、少し
厳しい顔をした後に

「面白いものを拾つたかもしれんな」

僕／俺と初めて会つたときと同じ玩具で楽しむ子供のよつな笑み
を浮かべた。

何かを尋ねても答えてはくれなもんじやつだったのでため息をつき、
再び外を眺めていると

「名前を決めなればならんな」

一応店につくと同時に、自分が事故に遭い記憶がない等自分に起きたことについては説明してあつたので、忘れてしまつた名前を新たに名前をつけることこじしたらしい。

「なんでもいいが、日本人の名前にしてくれよ」

何を捨ててもいいが日本人、これだけは捨ててはいけないと思つ。

顔を忘れた家族たちとの唯一の繋がりが日本人であることのよくな気がしたから・・・・・

「なら空山 海人なんていうのはどうじや？」

爺さんが僕／俺の後ろに貼つてあつた『夏休みは山か海以外の所に行きたい！そんな人には海外旅行で空の旅はいかがでしょうか？』という広告を見ながら言つてゐる気がしたが、名前を決めてもらつので文句は言わないとこした。

まあ後でツシ ツシ ツシをしなかつたことと後悔するわけだが、それは後日談なのでおこへおこへ。

とにもかくにも簡単に名前も決まり、届けられたアップルパイとアップルティーを堪能した後、爺さんの住家に向かうことになった。ギーではないよひである。ちなみに今のところ僕にアレルギー反応はないので、林檎アレルギーではないよひである。

・・・・・ いらぬい蛇足だな

爺さんは喫茶店から出た後に懐から宝石で出来た短剣を振るい、目の前を斬った。

最初はボケたのかと思ったのだが、どうやら次元を切り裂いて空間を繋げ、ワープするらしい・・・・・・簡単に言えさせどもアとかいうやつ変化版であろう。

ビービーでもアアといつものがよく分からぬいが・・・・・・

爺さんについていき、切り裂かれた空間の中に入ると、そこには鬱蒼と生い茂る森があり、その中には少し寂れた洋館があった。

『じつやう』が爺さんの住家のようだ。

余りにも人気がないのと、爺さんにどうして人がいないのかを尋ねたら、この『世界』は人がいないことに世界らしい。

そんなとじれで血給自足してこるの爺さんはとんでもないことに「い」とを再認識させられた。

僕／俺だつたら間違いなく孤独死しているな。

といつかこの爺さんは世捨て人と言える存在である。

森の中を歩いて館に向かい、寂れた館にたどり着くと中は手入れしていなかつたせいか埃や蜘蛛の巣まみれとなつており、当たり前のようには爺さんに渡された掃除道具で掃除させられた。

これからお世話になるから『じつやう』はしておくかといつ気持ちが出てしまつたのだが・・・・爺さんを甘やかしては録なことがないと知つた。

掃除が終わるとすぐに館の裏にある畠の手入れも命じられ、逆らつたら何かされそつた……。星のいいパシリを手に入れたいといつといふなのだろうか？

畠の手入れを終えた後は薪割りなどと引っ切りなしに用事を言い付けられ、言い付けられたことを終えたころにはクタクタになつており、汗だくの状態で爺さんに終わつたことをつげると汗でビチョビチョまま引きずりれて畠にぶち込まれた。

爺さんは「今日はもう終わったから汗を流してゆくつしていり」とのこと……普通に口で言つてはくれないだろうか。

爺さんのシンボルなんかいじつては見たくはないのである。

畠から出て『えられた部屋で睡眠を取り、朝を迎えると鼻をくすぐる』いふ句いがした。

どうやら爺さんが朝ご飯を作つてくれたよつた、味についてはさすが何百年も一人暮らしをしている爺さんとでも評価しておこう。

朝食を取り終え、飯を作つてくれた爺さんの代わりに洗い物をして

いふと「今日から勉強を教えてやる」などと素敵な笑顔で言われ、拒否したのだが毎日のように本の一杯ある部屋へと拉致され、勉強を強いられた。

・・・・7歳の子供は数学とか物理とか化学習わされるものだつたのだろうか？

また常識の欠如で爺さんに上手にこと言こへるもられ、勉強させられ続ける。

たまに魔術の勉強とか言つて色々叩き込まれたのだが、情報を消化仕切れずその度に氣絶している。

そんなこんなを続けて1年の月日が経ち、今だに感情全てを取り戻しきれてはいないもののウチの爺さんは常識外の生命体であることはひやんと認識出来た。

この点についてだけはマイナス思考の僕も両手をあげて自分自身を褒めたくなつたのは言つまでもない。

やつしてある日、畠で雑草などを間引きをしていると爺さんに呼び出され、椅子に座るよう命じられたので畠の前にあつた少し豪華な椅子に素直に座ると

手摺りと椅子の足から手錠のようなものが飛び出し、僕／俺を椅子に固定した。

突然の事態に理解が追いつかず呆然とした目で爺さんを見つめ、視線で状況を説明すると

「（――）」

とてつもなくいい笑顔を浮かべた爺さんが右手に青い螢光色に光る中身が入った注射器を握っていた・・・・・これが俗に言つ死亡フラグというやつか。

諦観を込め爺さんを見つめと笑顔のまま頷き躊躇いなく僕／俺の右腕に突き刺した。

脈とか関係なく突き刺していいものか疑問に思いつつも爺さんに何を打つたのかを聞くと

「10年ぐら^いい成長が止まる薬じや」

とかおぼれ^れになりやがつた。

更に

「じやちよ^うと修行しに行ひてこー。」

とか言つて注射を打たれてから何故か動かない身体を持ち上げられて、いつの間にか作られていた空間の切れ目に投げ込まれた。

・・・・・ 軽く苛立ちが過ぎつたが氣のせいだらう

切れ目の先にあつたのは爺さんの館にあつた森と変わらな^こぐら
い鬱蒼とした森だったが、一つ違うのは洋館ではなくボロボロの家
屋が建つていた。

しかも一昔古い江戸時代の人^が使つてそ^うな・・・

とりあえず雪が降りしきり肌寒く凍死しかける中、薬で動かなか
つた身体がようやく動くようになり、身体を引きずり森の中につ

た家屋の前に立ち、中にいるであらう人に呼びかけた。

「すいません、どなたかいりつしゃこませんか？」

すると中からウチの爺さんよつは若こ着物を着た田つきの鋭い着物を着た爺さんが出てくるので

「すいません、僕／俺は空山 海人と言こます」

「ふむ、名乗られたからには名乗り返さねばならんな。儂の名前は
新免武藏藤原玄信じや」

・・・・・ん？

どこかで聞いたことのある名前だな。

「空山殿といあえず上がつてくれないだりつか？老骨じよせんと外風
は辛くてな」

「あつすこません・・・ではお邪魔します」

新免さん「上がってくれと言われたので素直に家に上ると、中には火が焼べてある炉があつたので新免さんに許可をとり、炉に近寄つて暖をとりながら新免さんに簡単に事情を説明した。

すると

「儂が稽古をつけてやねりつか？」

と言われ……ようやく思い出した。

新免武蔵藤原玄信とはかの剣豪宮本武蔵の別名である「ヒトを・・・・嵌められた。

そして躊躇つていいの間に何無を訴ねやう弟子にされた。

「ひつて更なる弟子生活が幕をあけた。

《続く》

3話・理不尽が理不尽で理不尽な魔法使い

・・・・・人生ままならないとはよく言つたものだ。

その言葉通り、人生なんてものは他者が関わつてきているため思
うがままにいくわけもなく、人生は選択肢の連続であるわけで

選択肢を選び損ねてどんな人生を選ぼうが、後悔したところでゲ
ームのようにリプレイできるわけもなく・・・・・

例えば、なんとなくやつてみたくなつたガチャガチャが録なものが当たらずについ3000円ぐらい使ってしまつた時とか・・・・
・あの時のやる瀬なさは途方もないな

まあグダグダと長つたらしく何が言いたいかといつと・・・

「師匠、蠅を捕まえた箸で食事を続けるのをやめてください」

「まあ・・・・気にするでない」

蟻は非常に汚い存在であるということをこの爺に理解して欲しいのである。

ああ出だしと全然関係ないな

まあ出だしとかはともかく最初に箸で蟻を捕まえたことを褒めたら、それ以来繰り返し何度もするので見飽きた上にその箸で食事を続けるので、注意とかそういうレベルではなく蹴り飛ばしても辞めさせたかった。

まあ達人である彼に武の心得のない僕／俺のようなクソガキの蹴りが通じるわけもなく、部屋から外にぶん投げられそのまま稽古へと移行するのが最近決まりきったスタイルとなつた・・・・遺憾なことにな

既にこの世界に飛ばされて10年、

キシュア・ゼルレッチ・シユバインオーグの爺さんに打たれた不可思議な注射により身体が成長することはないが、筋肉だけがちょっとついた。

この歳の子にしては異常な力持ち程度になつたぐらいなのでまだまだ人の範疇ではある。

それに一天一流という新免武蔵藤原玄信に教えられている流派には力はいらない。

水を手本として心を水にするのである。水は角・円といふ器の形に従つて形を変え、一滴にもなり、大海ともなる。

水には青々とすんだ色がある。

よつはこの流派では肩を支点とした円運動によつて「一刀を扱う」とによつて、刀の重みを利用して斬るという方法（切つ先返しと呼ばれている）をとつていて、特に「一刀を使う型は全てこの方法で剣を使つて」いる。

二天一流の木刀は、あたかも板のように薄く削つた軽いものを使つてゐるが、これは切つ先返しの際に刃筋を制御する感覚を体得させること、そして前述したように、無駄な力を抜くことが眼目になつてゐるで今師匠に素振りを見てもらつてゐるのだが・・・・・

「やつぱつ前をさがしてゐるせじ木能が ないな」

分かつてるよクソジジイ

「…………」

「剣線にキレがないし、いまだに水の心が体得なしえてないとは……
・・・・・頑張りましょ」うというやつかのうへ。まあ今日で終わりじゃ
しょしとしょうかのうへ

「…………」

いちいち人の弱点を突いてくる師匠を無視して木刀を降り続ける。

よく剣術でやる型とかは習つたことがない。

一 天 一 流は構えあつて構えなし、有構無構といい太刀を形にはまつて構えてはあつてはならない、ということを重点においている。

太刀は敵の出方をきつかけとして、場所、戦況に応じてどう構えてあつても敵を切り易いように構えるのである。

上段も、少し下げれば中段になり、中段を少し上げれば上段になる。

下段も状況によつて少し上げれば中段になる。

両脇の構えも、位置によって少し中へ入りせば中段・下段になるのである。

そういうわけで、構えとはあつてないものである、とこゝにとて云ふ。

まず太刀をとる」とまじのようにして元ひきでも敵を斬ることが重要で、あり敵の斬撃を受ける、張る、当る、ぬばる、さわるとこゝことがあつても、これらはすべて敵を切るきっかけと心得て受けよう、張るう、ぬばる、ねばる、わわうと思つてみると、斬ることができなくなるので何事も斬るきっかけと思つことが肝要であるとは師匠のお言葉

で素振りだけではなく試合もさせられフルボッコにせられる」と一〇年

よつやくまともな剣豪と言える程度になつたから今日で修行を終わつにあらじこ。

長かつた、いくら才能がないからつてあんなに扱かれるとは・・・

多少涙目になりながらも新免武蔵藤原玄信に別れを告げ、迎えにきたキシュア・ゼルレッチ・ショバインオーグの爺さんと共に空間

の切れ目に入る。

久しぶりの我が家は・・・・気持ちいいな。

経つた一年程度しかここにいなかつたのに帰郷の念のよつたものが芽生えてしまつとは、あからざの生活がいかに大変なものだつたかを再認識させられた。

まあ実際のところはどうにしても扱かれることは扱かれるのだが・
・・・・・

どつやうじから時間では一年しか経つていないうらしく・
・さすが魔法使いなんというチート。
もしくは神による都合主義の力かもしれないな

多少浮かれながらも畠屋へと向かい、ベッドへと倒れ込み爆睡する。

わすがのはつちやけ爺さんも今日限りは扱きを赦してくれたようだ。

ありがと爺さん・・・世界で下から二番田づくりこに變じてる。

多分病院にいた脂ギッシュなペチャクチャ 五円蠅い看護婦のおばさんよりは好きだ。

くだらないことを考えつゝもベッドで横になつていると・・・

- - 轟 - -

爆音と共に部屋の扉が吹き飛ばされ

「遊びましょー」

赤い髪の身体のメリハリがある知らない女が笑顔で部屋に侵入してきた。

「誰だあんた?」

もはや扉を吹き飛ばされたことにツッ 「む『氣力もなくベッドに突つ伏したまま尋ねると

「私は蒼崎青子よー・・・・魔法使いなの!」

「…………。」

無言ではいつづばつたまま筋肉痛で激痛の走る身体を芋虫のよつに動かし、その場から逃げようとする。

知ってる魔法使いは一人しかいないがそいつがろくなもんじゃないのすぐに逃げることにしたのである・・・・・

しかし

ガシツ

「 わあ行きましたーやれ逝きましたー。」

足を捕まれ引きずられでどこかへと連れ去られる。

途中爺さんを見つけて視線で助けを求めるならサムズアップされた・・・・・爺さんの差し金か

最初から嵌められていた。

だいたい魔法使いなんかリリカルな少女に任せておいて、こんな
人外よろしくな連中は隠居でもしてればいいのに・・・・・

これから巻き込まれるであろう厄介事から逃れる術を思索しながらも

何故か二次のカルチャーに関しては消えていない知識について悩
む・・・・・記憶がなくなる前は身体に記憶が刻まれる程ヲタク
だつたのか・・・

どんな存在だつたんだ僕／俺は

《 続く 》

4話・流されて青から橙へ

魔術とは基本は『術者の体内あるいは外界に満ちた魔力を変換する』機構。

魔力を以つて『既に世界に定められたルール』を起動、安定させることで自然干渉を起こす術式。

各門派が取り仕切る基盤に従つて術者が命令を送り、あらかじめ作られていた機能が実行されるというもので、命令を送るのに必要な電流が魔力。

車という『ルール』にガソリンに当たる『魔力』を注ぎ込むことで走らせるようなもので、魔術の起動に必要なものはその起動に必要な魔力量とエンジンを回すためのキー（バス、呪文、コード）、そして魔力をエンジンに注ぎ込むための魔術回路の三つ。

魔術は万能ではなく、等価交換を基本とする。

出来る事を起こすのであつて出来ない事は起こせないということ。だがその『無』、あり得ない事に挑むことが魔術という学問の本質であり、大魔術、大儀式と呼ばれる大掛かりな魔術は「」、魔法に至る為の挑戦に他ならない。

また魔術師とは国籍・ジャンルを問わず魔術を学ぶ者達の事。

計測できないモノを信じ、操り、学ぶ、現代社会とは相容れない存在。故に世に隠れ忍ぶ異端者である。

ほとんどの者は根源の渦にたどり着くために研究をしているが、根源には中身が詰まつていないほうが到達できるためにどうしても研究は報われない。

さらに魔術師は体内に魔術回路という擬似神経、生命力を魔力に変換する路であり、基盤となる大魔術式に繋がる路、幽体と物質とを繋げる回路を持つていて、それをもとに魔術を発動させている。

魔術回路として機能している際は、人としての肉体がそれを嫌う為相応の苦痛を伴つ。

魔術回路は先天的に保有数は決まっており、魔術師の家系は自分達に手を加える事によって少しでも多くの回路を持つ後継者を誕生させようとするらしい。

ちなみに僕／俺の魔術回路は33本と割と多めとのこと。

さらにはそれぞれ魔術起源というものがたり、そのモノの存在の因となる混沌衝動。

その存在がはじまつた場所。
魂の原点。

この世の全ての分子は流転する。

精神、魂、生命といった枠組みに当てはめずに考えればこれらは何かに生まれ変わり続けている。

その無秩序な法則性を、脈々と繋がる存在の糸を、はじまりまで遡つた先にあるもの。

そこに至つては最早生命など存在せず、あるのは根元の渦において発生する「……をする」「……をしなければならない」といった衝動のみ。

その流れに従つて何らかの存在が形作られ、時として人間となるのである。

それ故に本能とも言えるものであり、この世の全てのカタチあるものがそうであるよう仕組んでいる絶対命令である。

基本的には知覚できないが、結局のところ全ての存在はこれに縛られているので、人間ならその人間の個性として何らかの形であらわれる。

そして爺さんが調べた結果、僕／俺の魔術起源は『否定』らしい。

これは第一魔法である『無の否定』へと繋がる稀有な起源であるとのこと。

さらに魔術特性は『浸蝕』・・・・・なんか子供番組の悪の幹部が使っていそうな気がしてろくなもんじゃない。

自分のろくでもなさを自嘲しながらも何故か眼鏡をかけ、偉そうに説明する蒼崎青子を見つめる・・・・・道の真ん中で黒板を取り出して授業することは、普通、じゃないよな？

武蔵との修行で大抵の感情は埋めることは出来たが、 いまだに常識とか普通というものに自信がもてなかつた・・・・・武蔵師匠も世捨て人だつたし、うちの爺さんは変人だし

悲しいことに周りに基準となる一般人がいないのである。

変人奇人の展覧会みたいなものだ。

それに感情の埋め方だつて常軌を逸していた。

なんで真冬に滝に精神修行と称して蹴り落とされる必要があつたのだろうか？

一番最初に埋められた感情は間違いなく殺意だつたと自負出来る。

で話を戻すと、そんな我々を見下したように見つめる青い髪でショートカットの眼鏡をかけた24時間働けますか?と言わんばかりのキャリアウーマンぽい人が煙草をふかしている。

その女の人は苛立ちと殺意を込めた目で蒼崎青子を睨んでいることから蒼崎青子の関係者であることが推測される。

「おい貴様、何をやつていい?」

先程まで部屋の中でGさんを見つけた時のよつた表情でこちらを見ているだけだった女の人�향が話し掛けてきた。

「あつ姉貴!んじゃあバイバイ!海人君!」

縄で縛られたまま道に放置された上、右手を一振りし蒼崎青子は僕/俺を置いてどこかへと消えていった。

・・・・だから魔法使いは嫌いなんだ

僕/俺が魔法使いに対する諦観を感じていると姉貴と呼ばれた女

の人は憐れみを込めた目でこちらを見たあとに・・・・・僕／俺を見捨ててどこかへと去っていく

あんなのが魔術師達が目指す、魔術とは異なり本当の意味で「奇跡」と呼べる現象を引き起こす神祕、その時代の文明の力ではいかに資金・時間を注ぎ込もうとも実現不可能な”結果”をもたらす物に至つた魔法使いかよ、あまりのいい加減さに嘆息しながらも横たわり続ける。

逃げようがない・・・・・完全に亀甲縛りにされているせいで手足が全く動かせないのだからしじょうがない

最悪だ。

あまりの出来事の馬鹿らしさ加減に呆れながらもさりげない生命の危機に冷や汗を流している

ブチッ

先程去つていったはずの女人がナイフで縄を切ってくれた。

どうやら刃物を取りに行つていたようだた・・・・・ああまともな人だ。この人はまともな人に違いない！

よつやく普通の人には会えた歡喜のあまりに感謝しよつとしたのだが・
・・・・・

「つむ、モルモットゲットか・・・」

そんなことをポツリとおぼざきになられた。

どうやらこいつもまともな人類の分類からは除外されていくよう
だった。

そしていつの間にか持っていた中身がオカシナ色をした注射器を
抵抗するまでもなく、打ち込まれ引きずられていく

そんな僕の様子を見て、曲がり角の壆に隠れて笑いながらサムズ
アップしてくる蒼崎青子・・・・・とりあえずムカついたので今
出来る精一杯の強がりで中指を立てておいた。

そして僕／俺は氣を失つた。

『続く』

5話・魔術孝策

蒼崎青子の姉という女性に拉致され、目を覚ますといかにも「人造人間製作所」的な場所に四肢を固定され横に寝かされていた。

そんな僕／俺の横には煙草をふかして僕／俺の様子を眺めているあの女がいる。

いつまでも代名詞で呼ぶのは失礼だと思い

「なああんた名前は？」

と平坦な声で尋ねると

「人に名前を聞くときは名乗つてからにしろ」

と呆れたような声でたしなめられたのでそれもそうだと思い言われたことに従い、自らの名前を名乗る。

「僕／俺は空山 海人だ」

「私は蒼崎橙子だ。言つのも嫌だが一応お前をここに連れてきたアレの姉だ」

心底嫌そうな顔をしながらも自分が蒼崎青子の姉であることを告げてくるので

「似なくてよかつたな」

と少しあかへつてないにも関わらずはちゃめちゃで他人を巻き込む厄介な存在なのが分かつたので憐れみながら言つと

「それが唯一の救いだ」

と遠い目をして言つていた。

僕／俺が目を覚ますとすぐに四肢を固定していた金属を外してくれたので、一応改造されてないかさりげなく身体をペタペタと触っていると右頬と首の圧迫感が消えていることに気づき触ると、入れ墨を隠すために付けていた包帯と絆創膏がなくなっている。

疑問に思つたので蒼崎橙子に尋ねようとしたが、それを察した蒼

崎橙子が

「鏡を見てみる」

と言つて事情も説明せずに手鏡を手渡してきたので言つ通りにして鏡越しに自分を見る。

すると首と左頬に走っていた入れ墨が跡形もなく消えていた。

驚きつつも現状の意味が分からず、再び蒼崎橙子を見るとまた人の心を読んだかのように何も聞かず

「人工皮膚を貼つただけだ。

宝石翁に頼まれるまでもなく元々人形の質をあげるために皮膚のテストがしたかったからちょうどよかつたんだ」

と聞きたかったことを寸分違わず教えてくれたのだが、その中にさらに聞きたいことを発見したので口を開こうとしたら

「キシュア・ゼルレッチ・シユバインオーグにお前さんが入れ墨を気にしているようだから隠してやつてくれと頼まれていたんだ。まあまさかあのバカがお前を運んでくるとは思わなかつたが・・・

・・・

とまたまた聞いたかつたことを先回りをして苦虫を噛み潰したような顔をして語る蒼崎橙子。

にしてもまさか爺さんがそんなことを頼んでいてくれているとは。
・

多少爺さんへの好感度があがり、爺さんルートに入りそいつになるのを抑えて蒼崎橙子にお礼を言つことにした。

「あつがとつ」

少しそうではない笑みを浮かべて、そつ言つと蒼崎橙子は驚愕した
よつて田を見開く・・・・・何か不自然なことがあつたのか？

しばらぐすると普通の顔に戻り、しかめつらを止めて口元に微笑
を携えて

「・・・やつこつ風に笑えるのだな

と言つてきた。

どうやら僕／俺が笑つたことに驚いたらしい、まあ確かに感情の喪失があつて久しぶりに笑つた気もするがまさか初対面の人にそんなことを言われるとは・・・・・

自分の無愛想さに多々落ち込みながらも帰ろうとしたのだが・・・・・・・・・・帰る手段がないことに気づいた。

僕／俺を誘拐拉致した蒼崎青子は姉である蒼崎橙子を前にして逃走したので僕を爺さんの家に連れていくことが出来る人間が見当たらないのである。

・・・・・相変わらずテキトーすぎる

あまりの馬鹿らしさに。レズポーズで落ち込んでいると、それを見兼ねたのか蒼崎橙子が四つん這いになつている僕／俺の肩を叩き

「本当にモルモットになると云つのであれば、あの馬鹿か宝石翁が来るまで衣食住を提供してやるつか？」

そう提案してきたので、すぐに肯定した。

帰れるといつならモルモットになるぐらい易いものだらう・・・

おわりへ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・多分・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・メイビー

結構な希望的観測な気もしなくはないが人生、細かいことを気に
しては生きていけないのだ

最近つづくべくそつ寒感させられた

「分かつたよろしく頼む」

そう言つと蒼崎橙子は口の端を歪めて微笑したのだが・・・ぶつ
ちゃけマジドサイエンティストな感じがして素直に笑顔とは言えな
かつたのが残念である。

ああ選択を早まつた気がしてきた

「まあ田の前でお前のよつな子供に死なれては寝覚めが悪いからな

などと言つてくるので、それを聞き、蒼崎青子がここに連れてくる
際に向やう思ひいていたことを思い出してふと呟いた。

「成る程、これがツンデレか・・・・」

「おいお前ちよつと待て」

蒼崎橙子はそれを聞いた瞬間、何やらコメカミをヒクヒクさせて
いるので、小首を傾げて

「蒼崎青子が『姉貴はシンデレラだ』とそう言っていたのだが違つたのか？」

「よし待つてお、今からあの馬鹿をブチ殺してからお前の認識を改めさせてやるつ」

何やら煙草の吸い口を歯み切りキレている。

いも数蛇だつたよつである。

あまりの殺気に思わず呆然としているところにやく怒りを抑えた蒼崎橙子がこちらを見て

「まああの馬鹿は一旦放つておいて、お前の魔術特性はなんだ？」

と尋ねてきた。

「どうやら魔術について詳しく述べてくれるみたいなので素直に教え
ることにする。」

「心爺さんには習つてはいるが確認のためにもう一度聞こえておこして
損はないだろ？」

「僕／俺の魔術特性は『浸蝕』だ」

「成る程『浸蝕』とはまた珍しくて扱いづらさのを・・・

素直に教えると何やら腕を組んで考え込んでいる。そんなに『浸蝕』
は珍しいものなのかな？

「『浸蝕』は魔術特性としてはかなり珍しくかなり異端でかなり扱
いづらい・・・・・ぶつちやけ面倒くさいな

「それはなんといつか・・・・・」

何も「メントのじょうがなかつた。

「基本的に魔術師は特定の自分にあつた魔術触媒といつものを中心
に魔術を発動させる。

しかしお前の魔術特性である『浸蝕』はどんな魔術触媒でも魔術を
発動させることが出来る、といつのも『浸蝕』によつて全てのもの
を『浸蝕』し自分の支配下に置くことによつて自分の身体の一部と
して扱うことが出来る、自分の身体に魔力を込められないわけがな
いからな。しかし、これ、といつ突出した魔術触媒がないというこ
とは全てが平均的に終わつてしまつ。普通、魔術師から抜け出
せることはないだろ?」

成る程、確かに青崎橙子の説明を聞くと『浸蝕』は扱いづらいこ
とが分かるな。

『浸蝕』によつて他の物体を自分の支配下におけるか・・・浸蝕
といつより汚染に近いな。

「確かにそれを聞くと『浸蝕』より『汚染』と言えるかも知れんな・

・・・・・ とりあえず色々なものに魔力を込めてみるといい

「了解した。

ではこれからよろしく頼む

僕は青に導かれて橙と出会った。

《続く》

6話・橙色は海と交わって空を舞す

まあなんだかんだで蒼崎橙子に魔術を教わりながら日々生活しているわけなんだが・・・・・爺さんと蒼崎青子の迎えがこねえ

もう三ヶ月程経つていて、お世話になりすぎて何やら肩身が狭い
んだが・・・・・・・・どうすればいいんだ爺さん？

さすがに身の回りの家事等は手伝だつてはいるがそれでも居候に変わりはないし・・・

しかもモルモットとか言いつつもこの人、割りとまともだぞ？

起きたら右手がドリルになつてたりとか、足がバネになつてたりとか、腹部に变身ベルトがついてたりとか、悪の軍団と戦わされたりとかエネルギー充電式になつてたりとかしなかつたしな。

まあ 一回だけ謎の紫色した注射を打たれたことがあるが気を失う程度だつたし・・・・・僕／俺の周りで初めてみる常識人だな。

ただお金に関しては「ぼらす」がるけどな、無一文になつてビールが飲みたいからつて一束三文で人形売るなよ。

その「」と云つて色々口をだしたら「私の物を奪つてしまつが私の勝手だらうが・・・・・まあ今度から氣をつける」とナイスシンデレを見せてくれたことを報告しておひづ。

少し顔を赤らめながら顔を背けて、「別にアンタに言われたからじゃないんだからね」と言えば満点だつたのだがさすがにそれを言つたら素敵なクマの人形とかにされて幼女に売られかねないので口には出さなかつたが・・・・・

青崎橙子とは三ヶ月程一緒に過ごして、多少は仲が良くなつたとは思える。

まあ餌付けとも言えるかもしれないが・・・初めて爺さんに料理習わさせられてよかつたと思えたからな。

やはり異性のロリヰターケーションは胃袋からと云つのは本当のようだな、と何か間違つたことを思しながらも無言で宣い飯を作り続ける。

今日は無難に焼きそばと中華風スープでいいだらう。

野菜を炒めながら中々迎えに来ないはひひけ魔法使いたひひつ
いて考えていると・・・・・

ふと気になつた。

魔法使いとは《魔法》を行使するものたちであるのは分かつては
いるが、肝心な魔法についてがさっぱり分かつていなといふこと
が・・・・・

特に気にになるのが第一魔法である。

第一魔法である『無の否定』とはなんなのか、『無』と謂われて
も『無』の定義が分からぬ。

簡単に考えれば悪魔の証明みたいなものなのだろうか？

悪魔の証明とは、簡単に説明すればモノや行為の存在を巡つて「
あること」に比較して「ないこと」を証明することが極めて困難で
あるところを比喩する言葉であり、言つなれば、「悪魔の最高
の知恵は、存在しないと思わせること」である。

「ない」との証明」という命題は、まさしく全称命題であり、その「ない」ということを示すには、すべての存在・可能性について「ないこと」を証明しなければならない。

その命題における全事象を検証し、その真偽を調べることは困難を極め、現実問題としては不可能であろう。

よつは『無の否定』なんて不可能ではないだらうかと思つたのである。

しかし今現在分かっている限りでは『無』とは『エーテル』という存在に該当すると思われており、『エーテル』が関係するということは『無の否定』とは『魔法』もしくは神秘の証明なのではないだらうか？

つまりこの『無の否定』とは『魔術』つまり一番最初に『魔術』を行つたものに対する敬意を表して『魔法』にしたのではないだらうか？

まあこんなクソガキが色々考えたところで最上級の神秘である『魔法』に辿り着けるわけもなく、今まで数多の突出した魔術師たちが挑んでいるものにどう考へても太刀打ちが出来るわけもない。

多少将来に不安を覚えるな・・・・・アレ?

というかいつの間に僕／俺は魔術師になることが確定しているのであろうか？
甚だ疑問である。

話を戻すが僕／俺に『無の否定』は不可能だと思われる。何故なら自身が『無』なのに自分を否定してどうやって生きよう？

そんな風に考えてしまつのである。

からっぽの上に今更、存在まで否定されて何があるのかとこいつ話だ。

「からっぽの僕／俺に向をじるところだらうか・・・・・・・

思考するあまつ口に出してしまつたのだが、それを聞き付けた蒼崎橙子は口の端を一ヤコと舐めて

「からっぽって」とは中に色々詰められるってことだろ? 中がか
らっぽだとと思うなら好きなようにどんどん詰め込んでいけ、それに
今の君を私はからっぽだとは思わんや」

と言われた。

「うむ、なんという素敵な姉御ふつりであるつか、あまりの蒼崎橙子らしさに感心していると何やらずつとこちらを見つめて来るので、いまだに慣れてはいない笑顔を浮かべお礼を言った。

すると蒼崎橙子はこの前と同じように目を見開いている・・・・・もしかして歪んだ笑顔になってしまったのだろうか？

自分の顔が見れないので内心オロオロしながら自分の顔をペタペタと触つて確認していると

「気にするな」

今まで見たことのないような花を咲いたような笑顔を浮かべてそう言つてきた。

・・・・・これがデレか。

口に出して言うなんて、愚行はするわけにはいかない。

口に出したら間違いなく悪の組織に対抗する昭和の正義の味方よろしく改造人間にされてしまうからな。

下りないことを考えつつも焼きそばを炒めていく、いい感じになつたので皿によそり、テーブルに置き青崎橙子が机につくのを待つた。

しばらくして匂いにつられて仕事場から出てきた青崎橙子が机につき、いただきますと言つて二人で一緒に昼食を取る。

なんとなく暖かい気持ちでござられるのである。

待つのはアレだと色々文句を呟つたが・・・・・・・・まあこん
な生活も悪くはない。

『続く』

7話・あいつが帰ってきた

マナとは大気に含まれる魔力で大源とも称され、その名の通り小源たるオドとは量的な規模が段違いである。

かといって無限というわけでもなく、その場のマナを使い果たせばオド同様回復には時間を要する。

魔術を起動するのに必要なガソリンのような物で、その際これを肉体の魔術回路に取りこむ。

これに満たされると元からあった肉体の感覚は塗りつぶされてしまう。

故に満たされるという事は同時に破却するという事を意味する。

ちなみにただ取り込めばそれだけですぐに魔術を起動できるというわけではなく、そこから更に違う魔力へと変換する行程が存在するらしい。

らじいといこのばじゅやら僕／俺は感覚で行っている部分があつて口に出して説明といつものが出来ないのである。

で話を戻すと魔術に必要不可欠であるマナを残念な僕／俺は呼吸を意識しなければ体内に取り入れることが出来ないのである。

呼吸とは大事なもので外気を体内に取り入れる事は外界と内界を繋げるイメージであり、吸う・吐くという動作は神を取り入れ、開放する動作の一環とされる。

呼吸や歩法、そして骨格などの要因によってその存在自体が神意を成した場合、その人物は呪文を用いずとも魔術師を上回る純粹な魔術回路であるという事になる。

通常この「体現法」は一生をかけて習得するものであるが、稀に生まれながらにしてそのように「肉体自体が魔術回路」たる天才達も居り、彼らは幼い頃から神童だの神子だと騒がれるが、大抵は後に魔道の者達に引き取られる事となる。

しかし中には誰の目にも留まらず成長し、魔術の存在など知らぬまま魔術以上の神秘に身を置く事となる者もいるらしい・・・まあとにもかくにも

『浸蝕』の基本は己を知ること。

己を知らば百戦危うからずとはよく言つたものである・・・まあその前に、敵を知り、がつくが

己を知らないものが他者を『浸蝕』して己が一部としても自分の支配下に置くことは出来ず、魔術の根本をなしえない。簡単に言えばようは精神修行をして悟りなさい的な感じである。

つまり自分の身体を隅から隅まで毛先から毛穴まで把握出来るようにならなければ真に『浸蝕』を使えたことにはならないのである。

後で聞いた話なのだがそこまでいけば用意に他人を『浸蝕』し、一生己の支配下に置くことが可能になるとのこと……うむ、鬼畜だな。

ちなみに僕の目標は爺さんを『浸蝕』してパシリにすることである。

まあ多少道のりが遠い気はしなくもないが、所詮は目標、有つて無いにも等しいのでポジティブ精神で突き進むしかないのだろう。

そうして目標のために座禅をして精神を高めているのにも関わらず、目標が目標であるために余計な邪念を振り撒き続ける。

……存在自体が邪念の奴に絡まればじょうがないかもしれないな。

「ねえねえ」『飯は～？』『飯～』

「……。」

「さよりとー」

「…………。」

先程から横にいる蒼崎青子がうきうたくてしょうがない。

あの後一年経つて青崎橙子との生活が続いていた中、ようやく迎えにきたこのアンポンタン魔法使いはそのまま爺さんの家に住み着き、爺さんが出掛けている間だけ僕／俺の保護者よろしくバクトリニアファージ寄生虫として爺さんの館に生息している。

最初はこんななんでも一応は魔法使いな、飯を食つて寝るしかしない大飯食らいの居候に魔術を教えてくれと頼んだら

「私は破壊以外に關しては普通の魔術師以下よ」とかおぼざきになられた。

それでもいいからとりあえず《強化》と《解析》ぐらいの基礎の魔術ぐらいは教えてくれと言つたら

「ずきゅーんとした感じでバーンって感じよ」とかインスピレーションを頼つたご説明をなされたので思わず、その日の昼食にハバネロの刺身とつて下手を取り除いたハバネロを差し出したのはしょ

うがなことだと思ひ。

といあえず第一回標を屋敷からここを追に出でたのは
言つまでもなく、一般的な思考であると言えよ。

仕方がないので蒼崎橙子の家（廃墟）の近くまで送つてもらい、
蒼崎橙子に教わつたのだが・・・・・・

「・・・・・ふう。・・・・・ヘッポコだな」と硝子のハート
を粉々にされた。

まさか《解析》も《強化》も出来ないとは・・・・・その事実
を知りあまりのヘッポコさに愕然として四つん這いになつて落ち込
んだのは言つまでもない。

ただなんとはなしにやらされた《変化》は得意・・・いや特異だ
った。

本来は強化よりも上位の魔術で強化が対象が元から持つていた能
力を高める物であるのならば、一ちらは対象が持つていなかつた能
力を付属させると言つて応用性の高い魔術なのだが、僕／俺の《変化
》は根本から物体を変質させて違う物質にするという、既存にはな
い新しい魔術として成立してしまつた。

多分これは《浸蝕》が影響しているのであると思われる。

無意識のうちに物体を《浸蝕》し、自分の支配下に置いてしまっているせいであろう。

でなければ小枝を金属に変えるなどなしえない。

本当は小枝に金の属性を加えようとして小枝全てを金属にしてしまい、失敗して現在に至るわけなのだが

これを見た青崎橙子が最初は田を見開き驚きをあらわにしていたのだが、やがてだんだんと真面目な顔になり使用を制限してきた。どうやら異端すぎて魔術協会に捕まつたらホルマリン漬けにされる可能性があるらしい。

もちろんラットになるのは嫌だったので、言ひとを守るより他はなかった。

ちなみにこと《変化》に関しては異常でもあつたよつて、ヘッポコ魔術師であるはずの僕／俺が一回も失敗しなかつたのである。

《変化》特化の魔術師であることが証明された。

まあ本来の《変化》ではないので、微妙なところはあるが・・・

・・・

それにしてもあまり役に立つとは思えない魔術だとは思えんな……
・・・精々小金を稼ぐ程度である。

若干カツ「コイイ魔術に憧れていた僕／俺には多少興ざめだつた。

自分の才能のなさに落胆しながらも外に待たせていたタクシー（
蒼崎青子）で爺さんの家へ帰宅すると、爺さんが帰つてきていた。

「おお久しぶりじゃな、海人」

呑氣にお茶を啜りながら久方ぶりに声をかけてくるので、目を細
め非難するように見る。

「ベノをまつつき歩いてたんだ爺さん？」

すると心底楽しそうにヤーヤと笑顔を浮かべながら

「なあにちよつと下調べじやわい」

とたうちまわつたので、嘆息をしつつ後ろから僕を抱きしめて、
撫でくりまわしている蒼崎青子を引きはがし、夕食の準備へと取り

掛からうと厨房へ向かうと

「海人」

後ろから爺さんに呼び止められ振り向くと

「なんだ？じい・・・・・ジジイお前」

いつぞやの素敵な螢光色の注射を笑顔で僕の腕に突き立てるクソジ
ジイがいた。

「大丈夫・・・じゃ・・・ねえよ・・・・・」

「大丈夫・・・じゃ・・・ねえよ・・・・・」

僕はしじらもじらになりながら文句を言い氣絶した。

『
続
く
』

8話・なつな・・・ん・・・だ・・・と・・・?

「ちよつちよつから色んな世界に行つて」

「頑張つてね～！」

「・・・・・・逝つてきます」

「まつほほ心配せんでも、死ぬよつな」とはあるまい。ただ3分の2ぐりい死ぬだけじやから

「なら大丈夫ね！」

「・・・・・・死ねばいいのに」

- - - - -

人生山あり谷あり

とは先人たちが遺した偉大な言葉の一つであると言えるだろう、その言葉について考えれば何が起きても動搖することなく、諦觀を込めた眼差しでああ僕の人生は谷しかねえなと思つたりとか谷しかないなら登るだけじゃないか！

と無駄に無駄で無駄なポジティブシンキングで前に進むことが出来るのだから・・・・・・・・・・だから僕はもう諦めてるさ、僕の人生の谷は底が見えない断崖絶壁だつて

「空山 海人だ。これからよろしく頼む」

多少抵抗を込めぶっきらぼうに自己紹介をした。

言つまでもないが僕は空山 海人。今現在16歳である。何？時間が飛んだ？

王紅（キング リムゾン）病にでもかかってたんじゃないのか？

僕が爺さんから受けた児童虐待について聞きたいのであれば覚悟しておけ

アレは人が聞いていいものじゃない
聞いたら廃人になるぞ？

まあ爺さんに言われて律儀に学校に通う僕も僕だとは思うが・・・

主に僕が。

思い出している途中でPTSDに襲われ気が狂ったように暴れるぞ？

地下8000mに生き埋めにされた時の気持ちなんか今思い出しただけでも鳥肌が立つ、その時知り合った自称魔法使いのうざつたい地底人についてなど尚更喋りたくもない。

・

何故こうなったかを詳しく言つと何時のように5分の4ぐらい殺された後風呂で汗を流し自室で爆睡していたら不意に変な気配を感じ目を覚ますといつの間にか学生服に着替えさせられていて、右手にトライマックス機通称・宝石剣を握った爺さんが笑顔でサムズアップしてこちらを見て

「穂群原学園とこつ所に通つてこい」とか意味の分からぬことをおぼざきになり

右手を振るつた瞬間、知らない街に飛ばされた。

制服の内ポケットに学生証が入つていたのでそれを頼りに言われた学園と向かい今に至る。

ちなみに何も持つていないので勉強もクソもない。

何をしろと言つのだろうか?しかもポケットの至る所を触つても小銭はあるか、財布すら入つておらず・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・無一文で叩き出されたのだ。

この状況で「爺さん死ね」以外の言葉が思いつくのであれば、是非聞きたるものである。

「じやあ空山君は空いている席に座つて

思考に埋没していると横にいる担任から着席するよう促され一番後ろの窓際というなんとも有りがちな席へと着く、すると

「どうも俺は衛宮十郎。よろしくな

隣の席にいた赤毛の青年が自己紹介をした後に握手を求めてきたので、包帯がグルグルに巻かれている右手で握手に応じて

「ああ空山海人だ。よろしく頼む」

と挨拶をしておいた。何やらお人よしくさいので、「何か困ったことがあつたら言つてくれ」とか言いそうだなと思った矢先にそう言われたので苦笑してしまった。そんな俺を見て何やら困ったように首を傾げていたが「気にしないでくれ」と言つて握っていた手を離し担任のいる黒板の方へと向き直つた。

ちなみに何故右腕がどこぞの痛い人みたいに包帯でグルグルに巻かれているかと言つと、つっここの前珍しく『変化』の魔術に失敗し右

腕が爆散しかけたのだ。

右腕を『変化』させ筋肉の量をあげようとしたのである、まあ遠回りな『強化』だと思つてくれれば間違いないはない。

そして失敗して右腕が毛深くなり、鋭い爪が伸び狼男みたいになつたので急いで術式を焼き消そうとしたら失敗して魔力が暴走して右腕がズタズタになつた。

その後失敗がバレ手当てされた後に屋敷から吊され、的にされたりと絶対虐待だとは思わずにはいられなかつたが心配をかけたのは自分だったので文句は言えない。

あんなに真面目な顔で怒つた顔をした蒼崎青子を見たのは初めてだつたから従わずにいられなかつた。

その後怪我がいまだに治らないので包帯を巻いているわけである。中身は治つているので問題は皮膚で、まあボロボロで人様に見せるようなものではなくなつてゐるわけだ。

怪我の原因を回想しつつ他愛のない諸注意などをじてこる担任のホーミルームを聞き流す。

そして放課後

授業？授業など全部爆睡したに決まつてこる（良い子は真似しちゃダメだぞ）、高校の勉強など爺さんに頭ではなく身体に叩き込まれたからな（泣）

で職員室にて鞄だけ受け取り、学校を出て気がいた・・・・

・泊まる所がないorz

衣食住が揃わなさすぎてこるorz

あまりのやるせなさに道の真ん中で四つん這いになりorzボーズを取つていると・・・・

「ん？どうしたんだ？」

カモがネギと鍋を背負つて立つやつてきた。

《続く》

9話・弟子は、せこせのみかたみならい、と田舎へ。

まさにカモがネギと鍋を背負ってきたとしか言によつがない状況・・・

・もう包丁すらくわえて持つてきているようなものだ。

「こゝろのこゝろ」とか言ひ出しそうだなと内心あまりのつまい展示に舌なめずりをしながらやつてきたお人よし（衛富士郎）を捕獲する。

「どうしたーー?」

急に足を捕まれた衛富士郎はいきなりの僕の行動に慌てているがそんなことは無視して衛富士郎に縋り付き

「泊めてくださいーー!」

プライドとかそういうのは全部ドブに捨てて必死に頼み込んだ、そんな様を見て慌てる衛富士郎

「だからどうしたんだってー。」

そして片膝を地面につき僕と同じ田線になり、事情を尋ねてくれる。

「実はかくがくしかじかで・・・・」

「実際にかくがくしかじかと言った奴初めて見たよ」

少しあふざけをしたら田を細め疑いを込めた眼差しで見てくる衛宮士郎。人を疑うなんてお人よしのお前らしくないぞー!とは口に出さずに内心文句を言いつつも、無一文で家から叩き出され学校に通わされたことを説明した。その際に家は外国にあるから帰れない旨も伝えるとアッサリと

「じゃあいつに泊まつてけよ」

と許可が下りた。

うんさすがだな衛宮士郎、僕の田に狂いはなかつた。
君がそういう子だと僕は信じていたぞ。

内心馬鹿にしたよつに褒めまくつながらも衛宮士郎の後についてい

や、彼の家へと向かう。

「助かつた衛宮士郎。寝るところの確保が出来て一安心だ。今日一日で世話になる」

歩きながら感謝の念を込めながら言つて

「いや住む場所見つかるまでしごいていいぞ。」

「・・・まあ? (。 。)」

いやいや待てよ衛宮士郎。せつかきた力モネギ鍋(包丁つき)だが、わすがにずっとこるのは悪いからとりあえず今日だけ泊めてもらつてから不法侵入なり不法占拠なりして住家を得ようとしていたんが

「

「なあ頭の中で言つてゐつもりかもしねないけど全部口に出してるぞ? 力モネギ鍋(包丁つき)って

「よく考える衛宮士郎。僕がお前の預金通帳とか金を狙つた悪党だつ

たゞひとりの氣なんだ？」

そう言つと困つたよつて首を傾げ

「懸念だつたらさんなこと聞かないだろ」

とかおほざきになりやがつた。なんという度し難い暗愚なんだ！
くつ泊めてもらつておいて言えることじやないがお人よしすぎる…。
とこうかそのお人よしに付け込んだ僕も僕だが・・・・・まあそ
こらくんは僕の衣食住がかかっていたのでおいておいて

「いむ、なら何か家事とかを手伝わせろ」

「こや箇にいりておつとをわせるわけにはいかないつて

トボトボと歩きながらも家に厄介になるので血の手伝いを申し出た
のだが、却下される。

「いやダメだ。衛宮士郎、お前が僕に何かを『える』ところのあれば僕はお前に何かを返さなければならぬ」

「いや、だけど」「一方的に『えられたものなど信用出来ん』なつ！？そつこう言い方はないだろ！？」

僕の言葉に前を歩いていた衛宮士郎は怒ったように振り返り少し大きな声で返してきたので

「だから信用したいから何か仕事を『えてくれ

いまだになれない笑顔を浮かべながらそつ頼むと、田を見開き驚いた顔をされる。

「どうした衛宮士郎？」

それを疑問に思い尋ねるとハツとしたより正氣に戾り多少田を逸らして

「いやそういう風に笑えるとは思つてなくてさ」

うむ結構失礼なことを言われた。

仕返しに頭を腕で掴み、そのまま抱えヘッドロックに移行する。

「痛たたた！痛いっ！」

「ふつ反省するがいい。衛宮士郎、僕のハートは豆腐よりも柔らかいもので出来ている」

痛がる衛宮士郎を無視してヘッドロックをしつづけ、多少飽きたところで解放する。

おふざけを終え、他愛もない話をしながら衛宮士郎へと向かい、着くとそこは古い日本家屋があり衛宮士郎はその中へと入っていたのと同じように中に入った。

清潔感溢れる家の居間にて衛宮士郎が入れてくれたお茶を飲みながら和みつつ、行動方針を立てていく

とつあえず仕事だな。何をするにも金はついてまわるからな、やれやれ俗世のなんと汚きことかと悟りを拓いた坊さんよろしく世の中に文句を言ひ。

衛富士郎はお茶を出した後に修理するものがあるからと家にある土蔵へと籠ってしまった。

暇なので庭に落ちていた石を捨い《変化》によりなんらかの金属に変えていく・・・・・なんらかのについては考へてはいけない。良い子は真似しないでねとしか言ひようがないのだから

いやあ、いつこいつ時に《変化》は便利だな、《鍊金》と違つてその物質に元々含まれていない金属へと変質することが可能だからなと自分が唯一出来る魔術を虚榮心のために自画自賛する。

だいたい売れる質にはなつたので作業を止め縁側でぼうとしているとチャイムがなつたので、無視をした。

他人の家のチャイムに出るのはどうかと思つたのだが、いつまで経つても来る様子が見られなかつたのでしうがなく重い腰をあげ玄関へと向かい扉を開ける。

「先ば・・・・・・」

すると和らぐよしの柔らかい笑顔を浮かべた藍色の髪をした女の子が立っていたのだが、僕が出てきたのすぐに笑顔を引っ込め警戒し始めた。

「ああ衛富士郎なら土蔵に引きこもつてこるぞ」

困ったよしに長く伸びた髪をかき、そういうとこまだ疑つた眼差しをむけてくるので

「僕は今日から衛富士家でお世話になる空山 海人だ」

自己紹介をして自分は怪しくないと自己主張した。

「・・・間桐桜です」

警戒しながらも一応名乗つてくれたので友好的にいくために右手を差し出し握手を求める。

「よひじくな

「…………ええ

躊躇いながらも間桐桜が僕の手を握った瞬間、右手から全身にかけて電流のようなものがほどばしった。しかし、それをおぐびにも出さずに何時のように無表情の顔をしたまま手を握り返し、しばらくして手を離した。

「…………今の感覚はなんだ？

初めて起きたよく分からぬ状況に内心焦りながらも問い合わせるような目で間桐桜を見るとよく分からぬといつのような顔をしている。

今の何かは僕にだけ発生したといつとか、相手の反応を確認した上でそう推測し一回そのことを放置することに決めた。そして間桐桜に

「衛宮士郎に何か用事があつたんじゃないかな？」と言つと焦つたようになへと上がり衛宮士郎がいるはずの土蔵へと小走りで足を向けている。

そんな間桐桜を眺めながら彼女の姿が完全に見えなくなつたのを確認して異常が出た右手を握つたり開いたりするが先程の感覚はどうに消えていた。

ふむ、まあ今悩んだところで答えが出るとも思えんな、そう判断し無駄な思考を中断し居間へと帰り畳の上で寝転がる・・・・・ああイグサのいい匂い。

新しい住居はわりとすぐに気に入った。

《 続く 》

10話・弟子、新たなる問題が発生する

他人の不幸は蜜の味

客観的人が少なからず酷い目にあつていたら多少なりとも話題となり、話しの肴になると云つことであろうか。巻き込まれない分にはそういうのも悪くはないだらつ・・・・・特に目の前で酔っ払いに絡まれているのを見るとそう思わざるを得なかつた。

「センパ～イ聞いてえるんでえすかあ？」

「落ち着け桜！」

一升瓶を抱え呂律が回つておらず、完全なる酔っ払いとして降臨した間桐桜に絡まれ大層困つてゐる衛宮士郎を見ているとなんとはなしに弄りたい気持ちにはなるのだが・・・・・

「空山さんつー！」

「なんだ？」

「先輩のお直操はあげませんからねえー！」

酔っ払いには見境がないので絡まれる相手に僕が入っているのが途方もなく厄介である。

大体いつ何時僕が衛宮士郎の貞操を狙っているなどという結論に至つたのかが謎である。僕は普通に異性を愛すことが出来る人間なのだが・・・

間桐桜の思考に理解出来ず、小首を傾げながらも文句は言わずにコップに残っていた日本酒を煽る（未成年だが別にお酒を飲むことを推奨しているわけではない・・・というか肉体の年齢は16歳だが精神的には30歳は余裕で越えているんだがな）。

やれやれ

内心嘆息しながらも次々と空けられていく一升瓶を見つめ後悔する、こんな風になるのであれば間桐桜に飲酒を奨めるべきではなかつたな。

手を首に置きぶら下がるように抱き着きながら何やら衛宮士郎に文句を言いつづける間桐桜を見てそう思った。

最初は住居が決まったお祝いにと思い土蔵から出てきた衛宮士郎を引っ張り酒を買いに行き、軽く慣らす程度に飲んでいたのだが、居間にいて僕たちのその様子を漠然と眺めていた間桐桜に軽い気持ちで一杯渡した結果がこれである。

アルコール耐性がないのにウワバミとはコレイカに？
タチが悪いとしか言いようがないな、絡み酒だし

外に出ようとするため息を押し殺し無表情で間桐桜の行動を観察する・・・正気に戻った際に間違いなく悶える程恥ずかしいことをしているな。

チビチビと酒を愉しみながら間桐桜の醜態を肴に飲み進めていく、他人の不幸は本当にいい肴だな、顔は無表情ながらも内心ニータニタと目を覚ました際の間桐桜の行動を予測し笑う。

酒もつき、ようやく酔い潰れた間桐桜を衛宮士郎がお姫様だっこで空いでいる客間に運ぼうとしているのでやおら立ち上がりしがなぐ手伝い、手の空いていない衛宮士郎の代わりに障子を開けていき布団を敷き衛宮士郎が間桐桜を寝かせるのを確認して部屋から出る。

何か居づらい部屋から出た後ブラブラと縁側に片膝を立てて座り、空を眺め夜空に煌々と輝く月を愉しみながら思う。どこの世界でも普遍に月は田を引くな・・・

自分に合っていないと分かりながらも、そのぐらいの共通点を見つけなければやつていけない。異世界に飛ばされた際に生き抜く術は

なるべく前にいた世界との共通点を見つけ、それを楽しむことである。それでもしなければ孤独感で押し潰されそうになる・・・・。まあいまだ感情が希薄だからこの程度で堪えられるのであらう。普通の人間なら気が狂つたように叫びだすだらうな。

そう推測して簡単にピヨンピヨンと人を異世界に飛ばす爺さんへの恨みを募らせる、帰つたらシャンプーを脱毛剤に換えてやうう・・・・。そう心に誓つた。

くだらないことを考えながらなんの風情もなく、ただひたすらに用を見る。

月見酒もよかつかも知れないな、既に無くなつてしまつた酒瓶を見据え少しだけ後悔した。

少なからず回つていたアルコールが体内で燃焼するのを感じながら夜風を浴びていると

「どうしたんだ？」

衛富士郎が後ろから話しかけてきたので、首だけを動かしそちらを見て

「円見れ」

となんの感情もなしに無表情でそう言つと衛富士郎「そつか」と頷いた後に風呂の位置を告げ、再び土蔵の中へと引きこもる。あいつはモグラかなんか?と家に帰ってきてから土蔵に引きこもつてゐる衛富士郎に呆れたという視線を送りながらも立ち上がり、せっかくなので風呂に入ることにした。

言われた道を通り風呂場にたどり着き服を脱いだ後、軽く身体を流してから風呂に入る。真夜中の風呂も中々気持ちいいな、衛富家の檜風呂に入りながらそう思つた。

濡れないようにして右腕の包帯を外し、怪我の経過を見ると右腕に異常が発生していた。グチャグチャに化膿し爛れていた皮膚は完全に治り、今までとなんら変わりないものになつていたが、皮膚の下に黒い線のようなものが右腕を縦横無尽に駆け回つている。よく見ると左頬と首にあつた入れ墨に類似していることに気がつく

これはなんだ?

よく分からぬ異常事態が発生したことに驚愕しながら他に右腕に異常がないかを確かめる。

握つたり開いたりをして感覚を確かめ、異常がないことを確認した

のだが、何故こうなったのかが理解出来ずについ。

ふと間桐桜と握手した際に走った電流のようなものを思い出し、何かをされたかと勘織つたが

あの様子では僕が魔術師といつことすらバレてはいないだろと勝手に判断しその説を否定した。

本来なら魔術師同士なら魔力とかでバレてしまうのだが、『変化』により自身の魔力を極端に下げカモフラージュしているのである。

これなら余程擬装に特化した魔術師でもない限りバレるようなことはないはずだ。

異常が発生している右腕を撫でながら温い湯に浸かり、身体を弛緩させた。

適度に身体が温まつたので髪を洗い、身体を洗つて風呂場から出て、身体を拭き衛宮士郎が用意してくれた服に着替え「えられた浴室へと戻る。

部屋に引かれていた自分で引いた覚えのない布団を見て衛宮士郎のお人よしすぎる性格に半ば感心しつつ、布団の上に座り右腕に包帯を巻いていく、巻き終わりなんとはなしに自分の左頬を触りそこに

あつたはずの入れ墨のよつたものを思い出す。

今は蒼崎橙子謹製の人工皮膚を貼つて隠しているが魔力を通すと脈動し人工皮膚の下からでも浮き出でしまう。

はあ

何かやる瀬ない気持ちになつたので今日何度目になるか分からないため息をつき、布団に横になる。

明日はせめて普通の日々であることを祈る。

まあ無理だとは思つが

《続く》

11話・弟子、記憶へと潜る

魔術回路を起動させる。

魔術回路は一度開いてしまえばその後は術者の意思でオンオフの切り替えができるが、そのスイッチになるイメージは最初の“開き”に関係していく、中には性的興奮で開くもの、自傷行為によつてのみ開く者もある。

僕が開いた理由は爺さんに無理矢理魔力をしこたま流され強制的に開かれた。

そして僕の魔術回路のスイッチになるイメージは暗闇で水面に雲が落ちたイメージである。

『沈潜・^{ゲイン・}開始』

魔術回路に魔力を流す。魔術師にとつて己の体内を流れる魔力をイメージするのは大事なことであり、僕の場合は濁流を歩き進む人間のイメージ。本音を言うとイメージ不足で魔力の流れが悪い。これだ、というイメージが沸かないのである。

呪文は自分の中へと沈み潜るための自己暗示。ただ深く己を知るために己の中へと潜る。

『-----肉体の状態を把握し』

間桐桜が魔術師と分かつたのは玄関での邂逅のせいである。

『-----基礎となる骨肉を認識し』

爺さんに耳にタコが出来る程、初対面の奴が魔術師か確かめると言われ、言われた通りに間桐桜を‘視’て魔術師ではないと判断した。

『-----構成された物質を理解し』

間桐桜の魔力は魔術師と言えない程少なかつた。

一般人でも微弱な魔力を持つ者はいるが、魔術回路がなければ魔力の生成はできず、ただ保持するだけにとどまる。だから魔術師は一定以上の魔力を帯びた者のみを魔術師と認められる。

『-----内包された精神を創造し』

故に間桐桜は‘魔術師’ではない。そう認識した……しか

し間桐桜は僕を、視、たのである。

僕と同じように間桐桜は僕を、魔術師、ではないか確かめたのである。

『 - - - 成長を促す経験を見直し』

故に間桐桜は、魔術師、であると判断し、『浸蝕』を試みた。普通、初対面の異性に対して握手をしようなどとは思わない、まして知り合いの友人など自己紹介して終わりだ。

敢えて自ら提案し、接触による『浸蝕』を試みたのだが、結果は失敗した上に右手に異常が発生してしまった。

抵抗されてもいよいよ失敗するとはなんとも情けない話ではあるが漠然としたイメージで間桐桜の体内に何かがある・・・いやいるということが分かった。

『 - - - 積み重ねられた年月を超越し』

だからと言つて何かをするわけではないが警戒することに越したことはなく、故にこんな朝っぱらから精神集中をして魔力を通す練習をしているわけである。

『 - - - 精神の深奥に宿る起源に干渉し』

ザーザー

精神にノイズが走る。

『・・・・・どうして僕が?』

「ガツ!?

頭をハンマーで叩かれたような鈍痛が脳内を駆け回る。

! ! !

! !

! !

止めて止めて止めて止めて止めて止めて止めて止めて
止めて止めて止めて止めて止めて止めて止めて止めて
やめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめて
やめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめて
ヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテ
ヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテ
ヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテヤメテ
「ガアアアアアアアアア―――っ――」
ただ痛みが走る。

「ガアアアアアアアアア―――っ――」

! ! !

「ああ・・・・・・」

最後に見えたのは何もない暗闇だつた。それが見えた瞬間氣を失つてしまつた。

ああ頭痛い。

！ ！ ！ ！ ！ セ ！ ！ ！ ！ せ ！ ！ ！ ！ セ ！ ！

あれが記憶を失う前の記憶なのか？
揺らぐ光、あれは多分蠟燭の炎だらう。
理解出来ない感情が渦めく

目が覚めると起きた時間から2時間程経つおり
6時30ぐらいになっていた。

ああ気持ち悪い。理解出来ない感情がグルグルと頭を巡り、脳を刺
激する。

与えられた部屋を出て洗面所に行き顔を洗う。
水を掬いぶつけるように顔を洗いつづける。

ドンッ

一心不乱に顔を洗つていると水の弾ける音の他に家の中に何かが倒
れるような音が響く

不審に思い、頭痛がする頭を抑えながら自分の身体とは思えない程
重い身体を引きずり音がした場所へと向かう。

そして音がしたと思われる部屋の襖を開けると

「セン・・・・・パイ・・・・・」

「おお

間桐桜に押し倒され馬乗りにされた衛宮士郎がいた。

あなるほど

すぐに襖を閉めた。

《續》

12話・弟子、人助けをしたはずなのに・・・

パンツ

朝っぱらから情事の行われようとしていた部屋の襖を力強く閉め、軽く頭痛のする頭を癒すために頭を揉みながらその場から踵を返す。

なんでこんな朝っぱらから他人のまぐわいなんぞ見なくちゃならんのだ、田頭を揉みつつも無表情ながら嫌そうにため息をつく

まあなんにしても間桐桜もしくは聞きたくもないが衛宮士郎の嬌声が聞こえる前に早くこの部屋から離れてなくてはな。

エアリー・ディングは大事だつて爺さんも言つてたしな

永遠と続く頭痛を堪えながらも早くその場から離れようとしたの
だが

「空山ああああああああああ———つ——！カンバツ———
クつ——！」

ところ、衛宮士郎の僕を呼び止める必死な声が聞こえたので、嘆息しながらもじょうがなく部屋の前に戻り再び襖を開けた。

田の前には当たり前のよつてピンク色一歩手前の光景が広がつて
いる。

「なんだ衛宮士郎？」

「助けてくれ！」

間桐桜の下で仰向けになり組み伏せられたまま、そんなことを言
われたので田を細め、衛宮士郎のヘタレ具合を批難するように

「衛宮士郎、据え膳食わねば男の恥「いいから！早く！ハリー・ハリ
ー・ハリー・ハリー！」・・・チツ」

あまりにもうるさいのでしじうがなく近寄つて間桐桜に止めるよ
う促そつとして、間桐桜の目の焦点が合つていないと気づく

ふむ、正気ではないから衛富士郎も抵抗したというこ
とか？

「催眠状態か？いや禁断症状みたいなものか？」

息を荒げ何かを求めるような物欲しげな目をして居る間桐桜を見てそう判断し、原因を探り元を絶つために魔術を使おうと思ひ

間違ひなく正気だつたら食つていたであろう一般人である衛宮士郎に魔術の行使を見られないよう横に退けてあつた掛け布団を投げかけ視界を奪う。

「うわー？」

掛け布団を掛けられた衛宮士郎が驚いて声をあげていたが、それを無視して掛け布団がズレないよう足で布団を抑えてから原因を探るべく『浸蝕』しようと間桐桜の頭頂部に右手を置き、意識のハツキリとしていない間桐桜に語りかけるように

「間桐桜、別にお前がいつ何時愛の確認作業をしようが知ったこと

ではない。止めよつとすひ思わん

「止めりよーーー！」

間桐桜に話しかけていたにも関わらず、下にいる衛富士郎が何やら横槍を入れてきとグダグダと騒いでいるので

「ひぬきこーぞ、衛富士郎。

・・・わつかも言つたように知つたことではないが、そんな状態で愛の確認作業をされるのは面白みがないので邪魔させてもらおつ

衛富士郎を黙らせた上で間桐桜に再び話しかけながら

『^{ゲイン・オン} 浸蝕・開始』

人に聞こえないぐらいの小さな声でそつ咳き、呪文により自己を暗示し身体に刻み込まれた魔術《浸蝕》を開始する。

僕は《解析》が出来ないので《浸蝕》してから相手や物を自分の支配下に置き、自分として《同調》することにより、《解析》の代わりにしている。

『浸蝕』を開始して異変に気づいた。

む！？『浸蝕』の浸透率と速度が格段に上がっている？

何故か跳ね上がっている『浸蝕』の精度に驚きながらも間桐桜へと潜つていく

昨日とは違い今回は完全に『浸蝕』が成功し、間桐桜の体内に蠢く異物・・・刻印虫を発見した。

ん？何か変なものがあるな・・・・・・眠っているのか？

嫌な予感というか変な悪意を感じたので迂闊には手を出さん方がいいだろ？

心臓に在った理解出来ない不審なものには手をつけずに全身に埋め込まれていて蟲へと目をやる。

これが原因か・・・・・刻印虫たちが間桐桜から魔力を奪い取つていたせいで初見では魔術師と気づけなかつたようだ。

そして間桐桜の憔悴状態もこれが原因のようであり、無意識の中に足りない魔力を他者から攝取しようとしたのであら。

魔力の攝取方法は・・・・・ああ成る程、これは『変化』させてしまう。

しかも魔術回路を「刻印虫による陵辱」という形で根本からいじくりまわされ、なんらかの属性を付加されたようだな。

こんなのは空を飛ぶ鳥が無理矢理泳げる様にする事と等しい行為だぞ？

・・・愚かな。

間桐桜は今現在、完全に魔術師としては終わっているぞ。

このままでは間桐桜は魔術を使用することは出来ん・・・・・

折角の才能を無駄遣いするとは

多少文句を言いながらも『浸蝕』により、間桐桜の魔力攝取の方法と魔術回路の改竄が分かつたのだがこれから魔力を与えるのにわざわざそんなことをしたくはないので、『変化』により魔力の攝取方法の情報を一旦書き換え、血液で攝取出来るよう『変化』させる。

魔術回路については今の僕の腕で下手に弄ると崩壊してしまうし、他人の魔術について口を出すつもりはない。

しかし望まれない行為で間桐桜が改竄を望むのであれば話は別だが、本人がこんな状態では聞きようがないな。

間桐桜の状態を見て嘆息しながら一旦書き換えた攝取方法により、自らの人差し指を噛み切り、人差し指から血が出るのを確認した上で間桐桜の口内に指を突っ込み血を口に含ませる。

「早く飲み込め、間桐桜」

口内にある血を飲むよう促したのだが、意識がハッキリとしていないせいかただ口に含むだけで嚥下しようとしている。

「チツ」

その様を見て舌打ちした後に、間桐桜の口から指を引き抜き、自分の口に人差し指を突っ込み血を含んだ後さらに唇を噛み切り、唇から血が流れるのを確認して再び口に含み、まだ意識のない間桐桜に話し掛け

「先に言つておこう、間桐桜。これはノーカウントだ」

唇を奪い、そこから舌を使い口内へと血を流し込み無理矢理血を嚥下させた。

魔力を摄取していく内に意識を取り戻していく間桐桜

すぐに離れたかったのだが今離れては後々魔力が足りなくなりそのままのでしおうがなく接吻を続けるが

間桐桜は今何が起きているかを理解せず、目の前の僕の顔を見て目を見開き僕を押しのけ

「イヤアアアアアー———っ！——

叫び声をあげた上で渾身の右パンタをかましてきた。

ふつ、座っていたわりには腰が入つたいい一撃だったな。

精神的な頭痛等のダメージを受けていた僕にこの一撃は堪えられず、錐揉みに吹き飛びながらヒルに笑い壁へと叩きつけられ気絶した。

もしかしたら無意識に《強化》の魔術を使ったのかもしれないな

《続く》

13話・弟子、お人よしを笑つ

ビンタされ氣絶した状態から目が覚めたが、身体の疲労感から横たわりつづける。

「お・・・・ろ・・・山・・・・」

横たわりながら先程のことについて考えることにした。

確かに殴り飛ばされる前にノーカウントだと言つたはずだつたんだがな、意識が曖昧になっている奴に言つても無意味か・・・・・・

「おい・・・・きり・・・・・・」

恋する乙女にとつては接吻といつものほどても大事な物らしい、そう蒼崎青子に教えられた。

でも爺さんといった世界に異性などいなかつたし、そんな注意などすつかり忘れていたよ（蒼崎青子は女性とは認められない、他人に首輪をつけようとする女などあつてたまるか）

「起きろつて空山ー」

「つるさいぞ、衛宮士郎。僕は助けた奴に石を投げられて生きていける程強い心を持つていらないんだ」

「起きてたのかよ」

氣絶していると思われる僕に肩を揺さぶり言葉をかけてくる衛宮士郎に嫌味を言いながら起き上がる。

ぶたれた左頬を抑え、室内に設置されていた鏡でぶたれた場所を見ると見事に紅葉が咲いていた。

一応左頬にある人工皮膚がズレていかないか確かめる。

む、さすが蒼崎橙子謹製だな。知り合いの中で一番まともな人物であるために、何時も褒めることは怠らない。

「ううう・・・

衛宮士郎の背後に隠れていた間桐桜が罪悪感で呻いているが無視をして左頬を弄つていると、

「そついえば桜に叩かれるなんて何をしたんだ?」

と間桐桜が手をあげたことが信じられないのか何をしたのか尋ねてきたので

「ああショック療法みたいなもので接ふ。」せつ先輩！朝飯作りないと…。」

正直に告げよつとしたら間桐桜が何やら顔を真っ赤にして焦つているので、不思議な顔をしている衛士郎を半眼で見据え

「まあ気にする必要はない」

空氣を読んで適当に「まかしておく

やれやれ

呆れながらも立ち上がると

「うふふ…どうしたんだ？」

衛士郎が立ち上がつた僕をほつけたよつて見つめ尋ねてきたので呆れ顔で

「朝食を作るんじゃないのか？」

と並んで

「ああ…忘れてた！」

時計を見て「時間がない」と言いながら台所へとかける衛宮士郎の背中が曲がり角に消えたのを確認して、俯いている間桐桜を見る。

「…………」

邪魔な一般人が消えたのにも関わらず間桐桜は何も話さうとしないので

「…………。」

ため息をつきしおうがなくこちらから話し掛ける。

「で何か話すことがあるんじやないのか、間桐桜？」

問い合わせるようにそつそつと俯いたままピクッと肩を震わせる間桐桜。

なんだこの僕が悪役みたいな空気は、加害者はあちらなんだが……感情が希薄な僕でも堪え難いぞ？

まあ先に言つだけ言つておくか……

「安心しろ、一般人である衛宮士郎にお前が魔術師であるなどと言えるはずがないからな」

「えつ？」

「そつ言つうと驚愕したような面持ちで顔をあげる間桐桜・・・む、何か変なことを言つたか？」

「納得のいかない顔をしつつ、何故そんな顔をしているのか尋ねよう」としたら

「せつ先輩は魔術師ですよ？」

「・・・はあ？」

「微妙に疑問形なのが気になるが、それは嘘だろ。」
あまり感情に変動がない僕でもさすがに愕然としつつ

「いやいやそれは嘘だろ。魔術師が自分の領域にそう簡単に他人を入れたりはしないし、あんなお人よしが魔術師なわけないだろ」

衛宮士郎が魔術師である」とを否定すると、何故かクスッと笑い

「そんなお人よしが先輩なんですよ」

と花が咲いたような笑みを浮かべ衛宮士郎について語った。
その恋する乙女の表情を呆れた目で見た後に

「そうだな、それが衛宮士郎だな」

と肯定せざるを得なかつた。

間違いなく爺さんにすら呆れられる程お人よしだからな

顔を歪めながら低く笑つた後再び間桐桜に話し掛け

「まあいい。衛宮士郎についてはおいておいて、お前が魔術師であることははどうでもいい

「・・・・・・」

そう告げると華やいだような笑みを引っ込め不安そうな表情をしてしまつ。

無表情でそれを無視し言葉を続ける。

「だから」の話はここで終わりだ

「えつ？」

「別に追求しようとは思わん。たまたま会った奴が魔術師だつだけの話だ、それに他人の魔術について関わるなどおこがましい。さて朝食を食いに行くぞ、間桐桜」

「えつあつ」

僕の言葉を聞き何故か呆然としているのでため息をつき

「昨日の肴も夕飯も美味かつたから楽しみだな

「はいー。」

話は終わつたと言わんばかりにその場から踵を返すと微笑みながら頷き、間桐桜も台所へと向かつていつた。

そんな間桐桜を見て嘆息しながらも一人を手伝うために台所へと向かい、衛富士郎に手伝ひを告げると食器を用意してくれと言われたので

言われた通りに食器棚から食器を取り出し、衛富へと渡していく料理をよそり終えた食器を居間にある食卓へと並べていく

大抵の用意を終えたので席についていると

「シツロー——ウツ——朝ご飯つ——！」

と叫びながら玄関から担任が入ってきた。状況がよく分からなかつたが面倒なので無視をして

「——「——」」

食事を取りにした。

うむ、美味しい味噌汁だな。いい出汁が出ている。

ほのぼのと食事を取り、味を楽しむ。

さすがだな衛富士郎。衛富士郎の料理の腕をベタ褒めしていると

「空山、醤油取ってくれ」

「これか、衛富士郎？」

「ああ、ありがとう」

醤油を取るよう頼まれたので田の前にあつた醤油差しを衛富士郎へと渡す。

更に

「空山君、麦茶入れ取つて！」

「これが、担任？」

「うん、ありがとう！」

担任教師に水差しを取るよう頼まれたので渡した後里芋の煮転がしを頬張る。

「美味しいな、衛富士郎。手伝おつと思つていたんだが邪魔になりそうだ」

「ん、空山は料理出来るのか？」

と尋ねられたので遠い田をして

「ああ出来なければ生きていけなかつたからな

と独白する。

本当にな、爺さんムカつぐ。

「やつそつなのか・・・」

そんな僕を引いたよつて見てくる衛宮士郎を見すて食事を続ける。

ほのぼのとした時間が続くが

いきなり担任が吠え、朝食の平穏が崩れ去った。

《統》

「ねえなんで！？なんで空山君がここにいるの！？あまりにも自然に溶け込んでたからお姉ちゃんスルーしちゃったよ！？」

「つむをいぞ藤ねえ。食事中は静かにしろ」

「然り、担任。行儀が悪いぞ」

「ふむ、道で四つん這いになり絶望にうちひしがれていたら捨てただけだ。捨てられた子犬とでも思ってくれればいい

「あんなに可愛いもんじゃないけどな」

担任のツッコミが冴え渡るが、それを気にせず食事を続ける。

涙目で何か喚いているが相手にしないでいると衛宮士郎が

「食事が終わつたらちゃんと事情を話すからそれまで待つてくれ」と宥めている。アレだな、保護者とかそういう言葉が似合つた衛宮士郎。

תְּהִנֵּה

呻きながらも渋々従つてゐる担任を見て、担任の扱いに慣れた衛宮士郎を感心半分呆れ半分の眼差しで見つつ食事を終え箸をおく

「『アラバマ州』の名前はアラバマ族の名前から取ったものです。

食事を開始して5分も経たずに食べ終える。味わっていないわけではないのだが、爺さんのせいで早く食べることが癖になつていてるのである。

やることが多く、修行もハードなのでゆつたりと食事を取る暇がなかつたのだ・・・今となつても決していい思い出ではない。むしろ忘れない思い出の一いつである。

とにもかくにも食事を終え、皆が終わるまで自分で入れたお茶を飲みつつテレビを見る。

『今日も私とマジカル ニヤンニヤン 魔法少女リリカルアンバー始まるよー!』

アニメの予告のようだ。主人公の女の子はピンク色のフリフリの割烹着に似たドレスを着て、装飾過多な杖を振り回し、返り血を浴びながら敵を撲殺している。そのうちぴぴる『放送規制』とか言いそうだな、それに魔法少女と公言しておきながらマジカル要素がない、どちらかというとバイオレンスとかアウトレージとかそういう言葉が似合ひそうな少女である。

とこりかマジカル ニヤンニヤンとは如何なものだらうか?ニヤンニヤンは完全に死語と言えるだらうじ、意味的には下ネタの要素が高いだらう。

明らかに平日の6時とこつ子供アニメの「ホールデンタイム」に放送していい作品じゃない。

真剣に子供番組について考察していると皆が食事を終えたのでテレビを切り食卓へと戻り、担任に説明することにした。

席につくときなり

「どうしてまだひつて、シロウの家に…？」

と乗り出しつて聞いてきたので、アアアアと泣き崩れるようにハングカチで田元を隠して

「聞いてくれ、聞くも涙、語るも涙の僕の事情を

と切り出しつて衛宮家にいるのかを説明する。

「転校する二日前に家が燃え全壊し、無一文になり両親が他界しているので頼れる親戚もなくフラフラと野宿をしながら生活している中、折角両親が用意してくれた高校にいかなければならぬと思いつつもなくひもじい思いをしたまま学校へと行きその帰りに空腹で行き倒れていると衛宮士郎が拾ってくれたんだ。そしてこの信じら

れないほどのお人よしである衛宮士郎は身元のはつきりしない僕を
住居が見つかるまでここにいてくれていないとまるで聖母やイエスの
よみが優しさでそう提案してくれたんだ、担任。ミミミ～

口調のせいが多少偉そうになりつつも説明して嘆泣が出来ればよ
かつたのが出来ないので、ハンカチで目元を隠し泣いているよう
に見せる。

「ひもじくて辛い中、現れた彼は本当に救世主のようで・・・ああ
ありがとうございました衛宮士郎。君の善意で僕は救われた、ありがとうございました衛宮士
郎。ありがとうございました」と

臭い芝居をしつつも騙される奴いないだろ?と思いつたと想はれる

「うう～そうだったの空山君。うん、いいよ。泊まつて泊まっちゃ
つて」

「「ええー?」」

担任が目元に涙を浮かべながら頷き宿泊を許可してくれた。
まさか騙される奴がいたとはな。衛宮士郎と間桐桜も驚いているし。
・・ああ担任は少し可哀相な奴なんだろ?」

担任に酷い評価をして切り捨て、騙された担任が駆け抜けるように学校に向かったのを確認し日元のハンカチを退けお茶を啜り

「まさか騙される奴がいたとは・・・・・・」

• • • • • • •

衛宮士郎に残念な子を見るような目でみると逸らされたので、担任は衛宮士郎の親しい人であるのだと推測した。

他人であれば同意するからな、羞恥するということは身内だ。

どこぞの身体は子供で頭脳は大人の少年のような推理をした後、学校に向かうことになった。

衛宮士郎と間桐桜が仲良く並んで登校しているので後ろの少し離れた位置で二人が楽しげに話しているのを目を細め見つめる。

記憶がなくなつていなければ彼らのように笑つたり楽しめたり出来たのだろうか？

でも二人を見て思つ・・・笑顔といつのはあんなに歪つだつただろ
うか?

色々な世界に飛びされ色々な奴の笑顔を見たが、笑顔とはあんなに感情を感じさせなかつたり、押し殺したようなものだつただろうか？笑顔が分からぬ僕には甚だ疑問だつたが、他人である僕が一人に関わるのはおこがましいと思い何も言わずにいた。

まあすぐに出ていくつもりだからな、指摘する必要が感じられんな。示唆する氣さえなく全てを打ち切り、一人についていく

途中衛宮士郎が振り返り僕を気にしていたが先に行けど手を振り、前にいくよう促す。

学校につき、靴を履きかえ教室につき自分の席に座ると同時に前めりになり腕を枕に睡眠を開始する。

左頬の紅葉を隠すために張つたガーゼに触れた後すぐに目を閉じる。

勉強などする氣がない。爺さんが何故僕をここに送つたのかすら理解出来ずについのに、今更前にやつたことを繰り返しやりたくはない。

昼食時すら無視して眠り続け、放課後となり目を覚ます。

何やら色々な奴から用事を押し付けられている衛宮士郎を細めの呆れた目で見つめ先に帰っていることを伝えた。

やれやれ

面倒な日常だ

とつあえず変わりに夕飯でも作ってやるか

《続く》

15話・弟子、初めての体験（グロテスクな表現あり）

ふむ、居心地のよさというのが人間を一番堕落させる毒のよさなものなのかもしないな。

といつのも実際に僕自身がそういう状態になってしまっているからな。

そう言つなれば冬の日のコタツのようなもの…！

居心地のよさのあまりなかなかコタツから抜け出せず、活動範囲がコタツ周辺となりコタツの周りが異様に汚いといつ…・・快乐による堕落とはそんなようなものである。

僕の場合、生活費は某金属を決して公表出来ないような場所で売りさばいて手に入れたし、一応バイトもすることとなり経済面での不安は一切消えたので一見なんら問題ないよう見えるが、問題は“食”である。

衛富士郎の食事に慣れてしまつたせいか、添加物の入つた弁当が美味しく感じられず自分で作った料理がギリギリ食べられるというラインまで舌が肥えてしまつたのだ。

あな恐ろしきは衛富士郎なり、くつあんなお人よしのポケポケしたような顔をしていながらまさか料理で人心を惑わすとは…やるな、

衛富士郎…！

衛宮士郎の意外な計略家。ふつりの驚愕しながらも毎月律儀に食費を納めている僕。

本当にやられたぜ、衛宮士郎！

無駄に衛宮士郎をベタ褒めしながらもサンサンと口差しを送る太陽を睨みつける。

衛宮家にお世話になつて既に6ヶ月が経過している。

すっかり夏の陽気となり僕たちはとっくに高校2年生となつた。そして通い妻をしている成長期で身体のメリハリが付いてきた間桐桜も高校へと入学し、ところかまわず衛宮士郎とピンク色の空気を出していて衛宮士郎は男子からの嫉妬と殺意を一心に集めている。ただ僕から言わせたら“ただ一緒にいるだけ”なので間桐桜が不憫かつ憐れでならない、まったく前進する様子すら垣間見せないとはさすが衛宮士郎だ。

しかし、あの鈍感さがあつてこそ衛宮士郎は衛宮士郎と言えるから何も言つつもりはないがな。

あんだけピンク色の光線を当てられて好意に気づかないものなのだろうか？

まあ感情が希薄というか壊死しかけている僕に誰であれ感情面につづいて云々言わるのはお門違いというやつであろう。

そんなことを考えつつも、また皆から頼まれ」とをして学校に残つている衛宮士郎を放置しスーパーへと向かつ。

今日は僕が夕食を作る番なので、食材を買いに行かなければならぬ。

今日は豚バラ肉が安かつたな・・・・。
やれやれ、いつの間にやら所帯じみてきたな、これが衛宮菌といつ奴か。

よく小学生がやるイジメの登竜門みたいなものだが、まさか実際に菌として存在するとは侮り難いな衛宮士郎。

魔力垂れ流しで土蔵で修業しているとは思えない狡猾さだ・・・
はつまさか、こいつやって油断した一瞬の隙を狙つて僕の貞操を狙つているのか！？

くそう奴が両刀使いだったとは、想定していなかつたぞー！？

これはすぐに間桐桜に伝えて、からか・・・・危険であることを示唆しなければならないなー！！

今日の夜起じるであろう出来事を想像し、無表情で衛宮士郎が慌ててている様を脳内で楽しんではいると・・・

「ハア・・・・ツ・ハアハア・・・・・・」

人通りの少ない路地で倒れている間桐桜を発見した。

どうやらまた魔力が枯渇してしまったのであろう。

このままじや一般人を襲つてでも魔力を榨取しそうな程目が虚ろなのでしょうがなく、嘆息しながら息を荒げて意識のハツキリしていない様子の間桐桜に近づいていき話しかける。

「どうした、間桐桜？また魔力の枯渇か？」

「空・・・山・・・・さん・・・・」

顔をあげ、息絶え絶えに憔悴した表情をこぢらへと向ける間桐桜。

「ちつ」

舌打ちをした後、間桐桜の魔力接種の方法を変えるために、間桐桜の頭頂部に右手を置き

『浸蝕・開始^{ゲイン・オン}』

間桐桜の中へと潜りうつした瞬間

「にげ……て……」

異変を感じ間桐桜を突き飛ばすと、目の前を何かが横切った。

空虚な目をした間桐桜の右手には包丁が握られており、それが振るわれたのであらうか、そのままだつたら間違いなく斬られていた。

ヤンデレか？

どこでフラグを立てたのか分からんがナイスボートにはなりたくはないな。

内心軽口を叩きながらも様子のおかしい間桐桜から距離をとり、いつでも抜けるよう足を肩幅に開き腕の力を抜いておく

「カツカカ！ 桜の奴め、最後の最後で抵抗しあつて」

俯いていた間桐桜が不意に話しだしたのが違和感が拭えない。
誰だ、アレは？

短い付き合いだが間桐桜の声はあんなに不快感を催すものじゃないし、あんな下品な笑い方をした記憶はない。

よく分からぬ状況に多少困惑しながらも間桐桜の形をした何かに話しかける。

「誰だ、貴様は？」

すると間桐桜の中から歪んだ氣色の悪い歳の老いた声色で

「カツカ力間桐臓硯、桜の祖父じやよ」

と笑いながら素敵に自己紹介をされたので

「僕は空山海人。間桐桜の知り合いだ」

その自己紹介に無表情で何の気持ちも込めずに返す。

「カツカ力、小僧。貴様儂の魔術に干渉したじやうつ。」

間桐桜の顔で不気味に僕に対する興味を隠さずにそう尋ねてきたので

「さあな」

不快感をあらわに受け流した。

「どうやら以前間桐桜に『浸蝕』した際に感じた嫌な感じはコイツのようだ。」

「まあいい。ちょうど実験台が欲しかったんじゃ………その身体いたたぐぞ?」

「一や一やと嫌らしい顔を浮かべ、僕をモルモットヒョウヒと殺氣を放つてくる。

「ひう」

舌打ちをし、すぐに己が武器を解放する。

『ゲイン・オン
変化・開始』

呪文と共に両手首から肉を突き破り金属が飛び出し、それを反対側の手で同時に引き抜く

左右に刀を振るい、付着していた血を飛ばす。

『起源刀・形無し』

刀紋はなく、柄もない、ただ切るための刀である。

両手の中に埋め込んである特殊な金属を取り出し変化させ刀としたのだ。

もちろん取り出す際に激痛が走るので本当に危険な時しか取り出さない、というか取り出したくない。

他にも色々あるのだが、それは後で説明しよう。

その前に

「いくぞ、間桐臘硯。

僕が受けた痛みの分だけ苦しめ」

武器を埋め込んである位置が悪いにも関わらずハッ当たり気味に、そう言って宣戦布告と言わんばかりに間桐臘硯に刃の切つ先を向けた。

『続く』

「いぐぞ、間桐臘硯」

僕の宣戦布告と共に路地の影という影が蠢き盛り上がり、そこから蟲が這い出てくる。

間桐臘硯はそれらの蟲を使役し撃ち放つてくるが、刀を使って間桐臘硯の数多の種類と数の蟲を縦横無尽に切り裂く、二刀流の基本は“円”、流れるように刀を動かし切る。

剃刀で紙を切るように薄くあて、後は刀の重さに従い切るだけ、力などいらない。

「ハアアアアアーーっ！！」

本来であれば生命力の高い蟲は半身を切り裂かれようと短い間、生き残り敵に牙を向ぐが『起源刀：形無し』で斬られた場合は異なる。

起源刀は磁力に反応しない溶けた金属に手術で引き抜いた僕の肋骨を碎き、靈的工程を以つて凝縮し入れ、その金属で打つた刀であり、僕の起源である『否定』を限界まで引きずりだし、発動させる。

一種の概念武装概念武装（決められた事柄を実行するという固定化された魔術品であり物理的な衝撃ではなく概念、つまり魂魄の重みによつて対象に打撃を与えるという物）と言えるこの刀は発動させることによりなんらかを『否定』しながら切り裂いているのである。

ただし、一本に付き一つずつしか『否定』出来ないので左手の刀は『状態の変化』を否定し刀がかけること折れることがなく、右手の刀は『生命力』を否定し致命傷を与えた敵が生き残ることがない。

強力なように見えるがいまだ使いこなせているわけではなく、その存在に応じて『否定』するための魔力も総じて高まり今『生命力』の『否定』がようやく使える程度なのである。『生命力』の『否定』は敵を仕留める一撃を与えるければ効果を発することはないので対人戦での使い道は微妙なところだろう。

こういう雑多な的にはこの刀は相性がいいのだが

۱۵۶

如何せん数が多すぎる。

狂った独楽のよう回り続け、手を振り刀を薙ぐ」とにより幾百の蟲を切り払う。数が数なだけあり、全てを切ることは出来ず何匹かに身体を喰われ、刃物のような顎で食いつかれ、痛みが走るがそんなものは気にせずに痛みがした場所を傷を気にせず拳で蟲を叩き潰す。

それを見て間桐臘硯が間桐桜の身体を通して歪んだ不快な笑顔を浮かべたような気がしたが、もはや気にしている余裕すらなく、否嘲笑されよつとこの身を止めるることは許されず。

筋肉を変化させ、筋力をあげるそれに応じて身体が悲鳴をあげ軋むがそれすらも無視して蟲を斬り続け、既に何百の蟲を切り払ったのかも分からぬ。

壊れたビデオテープを再生した時のように、同じ画面が何度も再生されているかの如く何度も何度も刀を動かし雑ざき蟲を斬り続ける。

「ハア・・・・ハア・・・・」

息を荒げるな、呼吸を整える、呼吸と同時に精神を保て、止まるな動け、斬れ、斬り続ける。

疲労により止まりそうになる身体に鞭を入れ、無我夢中で刀を振るい続ける。

行動の繰り返しと痛みにより感覚と精神が摩耗していく、触覚が、視覚が、聴覚が、嗅覚が・・・・・知覚することが出来なくなつていく

まだだ、まだ倒れるわけにはいかない。

――何故？

何も為していないからだ。

「何を為す？」

何かを・・・必ず

――ならば

『殺せ』

どこからともなく聞こえた声と共にカツチリと何かがハマつたような音がした、それと同時に知覚がハツキリとしていき五感が冴え渡り、身体がどうなつているかが手にとるように分かる。

本来ならば見えない位置にいる蟲を右手の刀で見ることなく斬り捨てる。

「むつ」

間桐臘覗は僕の様子の変化を感じ取り、一度蟲の攻撃を中断させ遠目から僕を推し量つてゐる。

「カツカカ！ どうした小僧、降参か？ 負けを認めて儂の糧となるか？」

ニヤリと嫌らしく笑いながら厭味を言つ間桐臓硯を無表情で見据え

「僕／俺はまだ負けてないぞ、間桐臓硯。心が折れない限り、負けたことにならねえ。心が折れない限り僕／俺は抗い続ける」

「はつ負け惜しみを」

鼻で笑い自分の優位を謡つ間桐臓硯を何も感じていないような表情で見つめる。

『殺せ』

「目の前にいるのは敵だ。ならば

『殺せ』

「己が命を危険に晒すものを

『殺せ』

頭の中に声が響き渡る、それは甘い呼びかけだった。優しく、子供を呼ぶ母のようになりに来るよう囁くような、そんな呼びかけである。

僕はそれに・・・・・

『浸蝕・開始』ゲイン・オン

右足に履いていた靴を間桐臘硯に向かって飛ばす。

「ふつ小賢しい真似を」

間桐臘硯は僕の最後の悪あがきと感じたらしく馬鹿にしたように笑い蟲を使わず、間桐桜の手で目の前に飛んできた靴を弾こうとするが

『炸裂』

「くつ

飛ばした靴に込めていた魔力を解放し、四散させる。僕の少ない魔力では目眩まし程度にしかならないが・・・
今はそれで充分

『**変化・開始**』
ゲイン・オン

下半身の筋肉を『変化』で強化し、刀を捨て風を切り裂くように疾走し間桐臓桜に肉薄する。

そして間桐臓硯がいまだ僕を発見出来ずにいる中、間桐臓硯に操られている間桐桜の頭を右腕で掴み

『**浸蝕・開始**』
ゲイン・オン

間桐桜の中へと『浸蝕』していく

以前潜つた時、間桐臓硯に接触出来なかつたが、表に出でてきている今なら・・・

掴んだ!!

このままっー!!

『私が聖杯の核になるわ』

『しかし、ユスティーツア！』

『大丈夫、私は貴方たちが私の願いを叶えてくれることを信じているわ・・・・・・頼んだわよ』

『ああ必ず叶えよつ・・・・・・世界を平和にしてみせる』

くつ間桐臘硯の記憶か！？

ザーザー

脳内にノイズが走る。

『駄目だ！出来ん！！何故だ！？くつ儂がユスティーツアの願いを叶えなければ！！くつ生き残るぞ！！生き残つてユスティーツアの願いを！..』

ザーザーザー

『生き残らなければ・・・・・・願いを・・・・・・』

ザーザーザーザー

『生き残る生き残る生き残る生き残る生き残る生き残る生き残る生き残る生き残る生き残る生き残る』

ザーザーザーザー

『生き残つて・・・願いを・・・・・不老不死に・・・』

ザーザーザーザーザー

『不老不死にならなければ・・・我が願いは不老不死』

『・・・・・助けて』

「ちつ・・・ナメるな小僧!-!-!-」

「ガツ!-?」

間桐臘硯は僕が『浸蝕』し記憶に潜ってしまったせいで無防備になつた身体に蟲を放ち、僕を地面に組み伏せる。

「くつ

「カツカカ！惜しかつたな小僧！！」

『浸蝕』により間桐臘硯がどういう存在かは分かつた。
そして最後の声は間桐桜の願い・・・・・身体から追い出すには至らなかつたが願いを聞いたのであればやることは簡単だ。

なんせ我が身は

「カツカカ！詰んだな」

勝利を確信し見下すように笑う間桐臘硯を見ながら今まで浮かべたことのないような歪んだ笑顔を浮かべ

「哀れだな間桐臘硯。自分の最初の願いを忘れたか？」

「くつ何をほざくかと思えば、儂の願いじやと？そんなの不老不死に決まつておるう」

歪んだ笑顔を浮かべ組み伏せられたまま間桐臘硯を見下し

「お前は元々はこの世の悪を根絶するために第三魔法を再現しよう」とし、魂の物質化による真の不老不死を求めてたんだよ。だけど永い時の中で魂は劣化し、想いは腐敗しちまつたみたいだな」

「ヤリと口を歪め間桐臘硯を笑いながら言つとそれを聞いた間桐臘硯を頭を抑えるように触り

「なつ！？儂は・・・儂は・・・」

混乱するように何かを呟く間桐臘硯を無視して、右腕を伸ばし間桐桜の心臓がある位置へと触る。

そして

『^{ゲイン・オン}変化・開始』

「ガツ！？なん・・・じゃ・・・と・・・？」

「誰が腕に一本しか刀が入つてないと言つた？」

右腕から飛び出した金属が《変化》により鋭い刃となり、間桐桜の胸へと吸い込まれ赤い血が吹き出る。

「くつ・・・まだじやー。」

間桐臓硯は間桐桜の心臓に自分の本体である刻印虫を埋めていたのである。それを一種の隙をつき貫いた。

しかし間桐臓硯は足搔くように何かをしようとするので

「カレー司祭に教わつておいてよかつたよ

歪んだ笑顔が浮かべたまま

「私が殺す。私が生かす。私が傷付け私が癒す。我が手を逃れうる者は一人もいない。」

「なあ！？」

焦り暴れる間桐桜の身体を抑えつけ

「我が眼の届かぬ者は一人もいない。打ち碎かれよ。敗れた者、老いた者を私が招く。私に委ね、私に学び、私に従え」

間桐臘硯を屈させるための言葉を続ける。

「休息を。唄を忘れず、祈りを忘れず、私を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる」

「やめろーやめてくれーー！」

悲鳴をあげ赦しをこいつ間桐臘硯を笑い続ける。

「装うなれ、許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、光あるものには闇を、生あるものには暗い死を。」

「ああ・・・ああ・・・」

「休息は私の手に、貴方の罪に油を注ぎ、印を記そづ。永遠の命は死の中でこそ与えられる。・・・・・終わりだな間桐臘硯」

苦しむ間桐臘覗を見ながらただひたすら欠けた月のような笑顔で

「 許しは此処に受肉した私が誓う。キリエ・エレインソン
“ こゝの魂に憐れみを ” 」

間桐臘覗を消し去った。

《 続く 》

17話・弟子、一命を取り留める

洗礼詠唱

それは聖堂教会において唯一留得を許される奇蹟であり、主の教えにより迷える魂を昇華し、還るべき『座』に送る簡易儀式。

魂を『無に還す』攝理の鍵。

彼らの『神の教え』は世界に固定化された魔術基盤の中でも最大の対靈魔術。

靈体や異形のものや惡しきものに最大の効果を発生するため、蟲に魂を移している間桐臓硯に取つて最大の弱点と言える。

さすがに零距離で洗礼詠唱を喰らつたので、逃げようもなく魂まで消し去つたと思われる。

『浸蝕・開始』 『ゲイン・オン

うむ、半死半生とはこのことを言つのか・・・間桐臓硯を消し去つたのは、いいが身體がスダボロだし血が足りん。

『浸蝕』により体内をコントロールし出血を止める。完治したわけではなく、ただ血管を収縮させ出血を止めただけなので、安心は出来ないが応急処置という奴である。

激痛が走る重い身体を引きずるよつと立ち上がり、刀を心臓に刺され地面に臥している間桐桜に近寄る。

既に彼女の中から間桐臓硯の気配は消え去っているのでなんら気にせず間に間桐桜を引き寄せ起こして具合を見る、一応呼吸はしているもののかなり危険な状態であると言えるだろ。

『ゲイン・オン 浸蝕・開始』

既に何回目かも分からぬ魔術行使に魔術回路が焼け付くように熱く滾る。体内を駆け回る炎のような熱に堪え、限界を超えた魔術行使をし間桐桜に『浸蝕』し、溢れ出る血をせき止める。止血はしたもののに傷ついてしまった心臓は治らない。

「ちつ」

あまり好転しない状況に自然と舌打ちが出る。間桐桜を見捨てれば簡単な話なのだが、それはなんとなく間桐臓硯との勝負に勝つて、戦いに負けたような気分に無意識に追い込まれ、壊死した感情でも負けず嫌いなのかそれには拒否反応があるので、その選択肢は捨てる。

心の中でそれを選んだら間桐臓硯の歪んだ笑顔が思い浮かび、多少腹が立つのである。

あまり使いたくはなかつたが、最終手段として間桐桜に突き刺さつて、いる刀を抜き傷口に指を突き入れる。

ג עי' . . . ג

痛みにより間桐桜が苦しげな声をあげるが、それを気にせずに指を更に奥へと入れ心臓に触れる。

『変化・開始』

とうに限界など超えた中での魔術行使は更なる激痛を僕に与え、その痛みが僕に声を上げさせる。傷だらけの身体は既に痛感など麻痺しているがそれでもなお広がる痛みなど無視して『変化』により間桐桜の心臓に触れている指先を失われた心臓の一部へと変えていき、失った場所の代わりとさせる。

痛みにより荒げてしまつた息を正しつつ、再び間桐桜の状態を見ると完全に指先は心臓と同化し血液の循環が万全となり、青かつた間桐桜の顔色も戻つていく。

現在、間桐桜と僕は僕の指先を起点に互いの血液を循環して、失われて戻らなず足らない血液の代わりにしているので指先を離すわけにはいかず、間桐桜の胸元に指を突っ込んだままである。たまたま血液型が同じで輸血が可能なだつたからよかつたものの、もし血液型が違つていたら更なる魔術行使により僕が気絶し二人共士の中で横たわっている所であった。

ここのまではまずいと思い、血まみれのまま衛宮家へと向かう。時間を確認し今の時間では衛宮士郎がいまだに帰つていないと推測した結果である。

普通に歩いて帰つても今のままで女子高生の胸に手を入れているただの変態にしか見えず、國家権力に敗北するのは目に見えているので、人通りの少ない道を通りながら世間の視線を気にしつつ帰宅する。

「・・・はあ」

自分の愚かさに嘆息しながらも衛宮士郎から間借りした自室へと間桐桜を運び込み、布団へと横たわらせ具合を確認する。呼吸が安定したのを確認し、間桐桜の肩を揺すり意識の覚醒を促す。

「起きろ、間桐桜」

んつ

間桐桜は呻き声のようなものあげ、閉じていた目を開き意識を覚醒させ辺りを見回し状況の確認をしている。そして自分の胸元へと突き刺さっている僕の指を見て、僕の指と顔に何回か視線を動かすと

悲鳴をあげ僕の左頬をフルスイングでビンタした。以前のように吹き飛ぶわけにはいかないので、その場で堪えいまだ混乱し顔を朱くし僕に物理攻撃を加えている間桐桜にどうしてこうなったのか緯を説明をすると

「あつ・・・」

罪悪感から顔を青くし俯き僕の視線から逃れようとする。

「…………。」

その有様を無言で見つめ色々考えた上で

パンツ

「…………えつ？」

間桐桜の頬を叩いた。呆然とする間桐桜を無表情で見据え

「何故お前が罪悪感に駆られる必要があるんだ、間桐桜？」

「えつ？ だつて私がムグッ……」

グダグダと何か言おうとするので、空いていた左手で間桐桜の頬を挟み込み喋れないようにした上で

「戯けが、アレがお前のせいでお前の意思でした行為であるというのならばお前などあそこに捨ててきている。お前は抗ったのだろう？ 例えどんな小さな抵抗であろうとお前が抗ったという事実があれば、お前を責める気など起きん。例え事実を知った一般大衆がお前を責めようともな」

「…………」

口を抑えられアホのような顔をしながらも殊勝な様子で無言になる間桐桜に対し何回使っても慣れることのない笑顔を浮かべ

「なんせ僕は、悪、の味方だからな。つまらない、正義、を振りかざす奴らの敵なんだから」

珍しくアホなことを言つと、それを聞いた間桐桜は何故か目を見開き愕然としている。

多少気になり話し掛けたが、いくら呼び掛けても反応をしめさないのでもう構つことをやめる。

「まだ間桐桜の胸元に指を突つ込んだままのこの状況をどう乗り切るかを悩みつつ、とりあえず山場を乗り越えたことに安堵し頬を歪める。

何故か呆然としている間桐桜を気にせずに無理矢理立ち上がりせ、
空を眺める。

ああ悪の味方も悪くない

『
続
く
』

一寸先は闇。

闇の夜の行く道の一寸先には何が転がっているか分からぬといふ事柄からこの諺は成り立つたものであるが、よく考えると一寸先が分からぬということは、もしかしたら闇という否定的なものではなく、貴重な物や食べ物や金目の物が転がっているかもしれないということが言えるであらう。

まあ食べ物に関しては拾い食いするものがいるとは思えないが・・・

・・・

「三秒までなら食すことを辞さない覚悟です」

むつ何やら金髪のアホ毛の人から電波が、カットカットカットカット

ツト

閑話休題

現実的にはたかが僕一人で明るい未来を望んだり信じたりしたところで今現在進行中のこの状況を覆せるとは一?たりとも思つてはいないが・・・
で何が言いたいかと言つと・・・

・・・・・ビハシヨウヘ.

この状況は世間一般では役得という奴なのであらうが、女子高生の胸元に手を突っ込むというのは、実際の所触っているのは胸じゃなくて心臓なので得の部分がよく理解出来るものではないのだが

代わりたいという奇特な御仁がおられればすぐにでも代わりたいところではあるが、比喩的な意味ではなく現実的な意味で手が放せないので現状を打破出来るとここのであればいくらでも代わることを辞さない。

ちなみに僕は性欲というものがいまだ不完全なので異性に対して情欲とかがわくことはないのである。それに言つておくが指先は心臓と同化しているので触りようがないぞ？

とにかくにも大事なのはこのままではどうしようもないことこのことである。

指先が間桐桜の心臓と繋がっているせいで身動きが取れずにはわけだが、どうやってこの事態を乗り切ればいいのか甚だ疑問ではある。

一番確實なのが僕を監視しているであろう魔法使い一人に助けを求めることがあるが・・・下手したら爺さんは見ていないかも知れないし（爺さんは野球とかは結果を知れば楽しめる派）、青崎青子に至つてこの状況であえて突き放し貴方の判断でどうにかしなさいと言つてくるかもしれない・・・役に立たん奴らめ

もう一つは青崎橙子に連絡を取り助けを求めるという方法だが、青崎橙子はたまにぶらりと出掛けで2~3ヶ月帰つて来ない場合があるので今住家にいるのかが問題である。幸い同じ世界なので連絡は取れるのだが・・・

『 留守番サービスセンターに繋ぎます』

つむ、留守だった。こいつの時に携帯を所持していて欲しいと思うのだが、今更なのでまた今度会つた際に伝えるとしよう。

やれやれ、本当に人生とはままならないものだ。

「・・・はあ」

あまりの状況の停滞具合にため息をつくと

「あの・・・大丈夫ですか？」

間桐桜がため息をついていた僕を気にかけてきたので、手をブラブラと振り大丈夫であることを言外に伝えた後

「間桐桜、お前の知り合いには腕のいい魔術師はないのか？」

しうがなく間桐桜を頼ることにして、知り合いにそういう人物がいなかを確認する（衛富士郎は除く・・・あいつは魔術師とは言わん）。

すると間桐桜は一瞬の間を空けずに

「一人だけいます」

と言うのでその人物に連絡をとつて貰おうとしたのだが、そう頼むと何かオロオロと拳動不審な様になり連絡をとることを躊躇ついた。

その様を見てやおら嘆息しながら間桐桜に無表情で

「命がかかっているんだからグダグダやつてないで早く連絡しろ」
半ば脅すような口調で話しかけ、連絡することを促し受話器を渡すと

漸く決心したのか電話番号を押して、その相手とやらに電話をしている。小さな声でぶつぶつと話していたので聞き取れなかつたが、移動することになつたらし。

なんでも言葉だけじゃ状況が伝わらないので、説明するより手つ取り早いからこっちに来いとのこと。まあなんともアグレッシブな奴だなと会つたこともない赤の他人に変な評価をしつつ、国家権力やら一般大衆に見つからぬようコソコソと隠れながら目的地まで移動する。

そうしてたどり着いたのは西洋風の洋館で、間桐桜はそれを眩しいものを見るようなそんな目で見ていたので

「早く入れ」と中に入るよつとて、中にいる魔術師の所へと急ぐ

廊下を歩き、リビングのような部屋の扉をノックする。

「入りなさい」

中から聞こえてきたのは予想とは違つ鬱屈した魔術師然としたものとは違い、凜として透き通るような意思の強さを秘めた声であった。

その声に多少聞き惚れながらも間桐桜が扉を開け中へと入るので、

それに続き共に部屋の中へと入ると

そこで待っていたのはお嬢様お嬢様した髪を二つ縛ったエセツインテールのような髪をした女の子で、こちらを見ると目を見開いき愕然とした表情を浮かべた後、何故か目頭を揉みはじめ幾分か経つた後に再びこちらを見つめてニッコリと笑顔を浮かべ

「アンタ、何やつてんのよーーー！」

そう叫び、僕に指先を向け黒い何かを放ってきた。

・・・・・お前たち姉妹かなんかだろ。人の話を聞かない辺りが

そっくりだよ畜生。

そんなことを考えつつ氣を手放した。

《続く》

19話・弟子、あかいあくまと知り合ひ

魔力の籠つた宝石を胸元で握りしめ、空いている手をこちらへと向ける。

『Anfango.』
セックター

魔力が体内を綺麗に循環していく様子が見て取れた。

成る程これが間桐桜の闇であり、光である遠坂凛か・・・

目の前で呪文の詠唱をしている女を見て理解する、確かにこんな眩しい存在が近くにいたら間桐桜はへこむだろつな。

『Zugang habe.』
アクセス

以前、間桐桜に『浸蝕』した際に見た記憶の中で一番彼女が眩しい存在であり、一番影が纏わり付く存在だった。

間桐桜にとつて遠坂凛とは尊敬しながらも、嫉妬し、憧憬しながらも、恐怖する存在であると言えよう。

『Ich trenne es (切り離し)』

そして唯一の家族であるが故に共に在りたいと願いながらも、自分がされてきた行為を知られ拒絶されることを恐れている。まあそれは衛富士郎にも言えることだが、親愛の情と恋愛感情はまた別ものだからそれぞれ重さが違うけどな

むつ、ようやく指が外せたぞ。

・・・・・人差し指が無くなっている。成る程、質量保存の法則か失われた間桐桜の心臓の代わりに僕の指を置いておき、先に心臓を修復させるつもりなのか

遠坂凜の卓越された技術に舌を巻きながらも、それを観察する。

『Wiederherstellung (修復)』

正直な話、自と他を比べて生まれる嫉妬やら卑下やら虚栄心はまた優越感というものが、いまいち理解出来ないので間桐桜の感情がよく分からぬが・・・・・

間桐桜と遠坂凜は別の存在で、それぞれが確立された自我を持っているというのに他と比べ続けることに何の意味があるのだろうか？むしろこちらとしてはどんな存在であれ、確立された自我を持っている間桐桜が羨ましくてしおがないのだがな

・・・・・ふむ、これも嫉妬の一部と言えるかも知れないな。

『M.iD.b.i1d u n g (変型)』

心臓の修復も終わつり、歪つになつてしまつた心臓の整形までしてやるとアフターサービスも漫然、だな遠坂凜。そんなに妹が大事なら最初からあんなことを言わずにいればよかつたものの・・・・・やはりツインデレカ？

さてこつして心臓の修復作業をする前に遠坂凜が僕を吹き飛ばし、一悶着あつたわけだが・・・・・

それについて語るとしよう。

まず着いた矢先にぶつ飛ばされたわけだが、それについてはこちらにも色々と非があつたので一旦保留として間桐桜の心臓を修復してくれるよつ頼んだのだが・・・・・

「魔術師ならば、等価交換の法則は分かつてゐるわよね？」と魔術師然とした感情を押し殺した表情で、そう言われて間桐桜が少しだけ悲しそうな顔をしていた・・・・・魔術師同士として扱われたこ

とに対する悲しみを覚えたのであります。

そう推測しつつも一刻も早くこの状態から解放されたいので、こんな茶番に巻き込まれたくはなかつた。

「ふむ、ならば魔術を解除して半死半生の間桐桜を放置していくから好きにしてくれ」

それを聞いた瞬間、遠坂凜は目の色を変え激怒したようになりながら見てくるので歪んだ笑みを浮かべながら言葉を告げる。

「僕に間桐桜を助ける義理はないんだ。ここに捨てていっても構わないだろ?」

「ぐつ・・・ふざけんじゃないわよ!」

遠坂凜はそれを聞き更に怒りをあらわにしたので人を喰つたような笑みを浮かべて

「助ける義理がない赤の他人が助けて、助けるべきである姉が助けないなんてことはないよな?」

と言つと姉妹二人は目を見開き驚愕しながら、こちらを見てきたので『浸蝕』で間桐桜の記憶を覗いてしまったことを告げた。非常事態だつたため、無罪となつたが・・・・・有罪だつたらどうなつたかなど考えたくもない。

助けたいという感情を押し殺したまま・・・手が届くのに助けられないことほど愚かなことはないので、一応色々条件を出し無理矢理遠坂凜を説得し、今現在の状況に至るというわけだ。

最初から助けたかつたら助ければいいのに、魔術師が、魔術師、で在りつづける必要などがどこにある?

くだらない固定概念にギチギチに固められるぐらいならそんなものドブにでも捨ててしまえばいいのだ。

そんなことを考えていると、漸く魔術の行使が終わり残すところは僕の人差し指だけとなつたのだが・・・・・

「一息ついているといひ悪いが・・・僕の指を治してくれ

すると遠坂凜は意地の悪い笑みを浮かべ

「家族を助けるのは当たり前だけ、赤の他人を助けるのは当たり前かしら」

とてもいい笑顔を浮かべながらそう告げてきたので、少し考えた上で人差し指のない右手を手刀の形にして間桐桜へと向け

「では赤の他人から人差し指を返してもらおう」

心臓をつき、心臓の一部となっている人差し指を返してもらうことを言外に伝えると、拗ねたように頬を膨らませ

「冗談よー・冗談!」これで貸し借りなしですからね!」

「なら早く治してくれ

「分かつてゐるわよー・・・・・ええと残りの宝石は・・・・・あれ?」

修復作業に取り掛かると思いきや何故かアホっぽい声をあげている遠坂凜・・・・・まさか

「……」めん。宝石使い切っちゃった

・・・・・なんだうつ。

今ウツカリという言葉が浮かんだのだが、異様に遠坂凜に合うな。
その様を見て嘆息しながらも、そこら辺にあつたボールペンを取り出し、右手で握りながらなげなしの魔力で

『ゲイン・オン
変化・開始』

ボールペンを変化させ自分の人差し指として、右手に接続させる。手を開いたり閉じたりを繰り返し動作に不備がないことを確認していると

「・・・・・・・」

何故かすごい目で遠坂凜に睨みつけられた。

その視線に怯えながらもなげなしの魔力を使い切つたことと峠を越え安堵したことにより気を失った。

20話・弟子、調子に乗る・・・・・

「狂ったように砂糖とカフェインの入った紅茶を頼む」

「はい、分かりました」

『ゲイン・オン
浸蝕・開始』

「・・・・・ねえアンタのそれ、魔術師ナメてんでしょ？」

「ビッグ空山さん」

「むつ感謝する間桐桜。おおちょづどいい感じだな、さすがだ」

「いえそんな・・・」

「謙遜するんじゃない。出来たことに對して素直に言葉を述べただ

けだ間桐桜。むしろ誇るべきだろ？

「聞いてんの！？馬鹿にしてんでしょーーー？」

遠坂凜に渡された何の魔力も籠っていない宝石に『浸蝕』により魔力を込めながら間桐桜が持つてきてくれた紅茶に舌鼓をうつ。

「何を言っているだ遠坂凜。僕は約束通りお前の宝石に魔力を込めているだけだろ？が

「アンタは『魔力を込めた宝石をくれる』って言つてたじゃない！」

「ふむ、だからこいつやって魔力の籠つた宝石を渡しているではないか

先程まで魔力を込めていた宝石を遠坂凜の手の平に置く

「私はアンタの持つてる宝石を渡すのかと思つてたのに…どうして
いつから宝石を提供しなきゃ いけないのよ…？」

「意志の疎通が出来ていなかつたようだな、恨むならバベルの塔を
建てた人間に對して怒りを覚え言語をバラバラにしてしまつた神か、
神の怒りに触れた人間たちを恨むといい。ああ神よ、貴方のせいで
哀れな子羊との意志疎通が出来ずに勘違いをしてしまつております、
アーメン」

「馬鹿にしてんでしょ…? アンタ絶対私の事馬鹿にしてんでしょ…?
?」

ウダウダうるさい遠坂凜を尻目に机の上に置いてある宝石の一つ
を手に取り再び魔力を込めていく

『ゲイン・オン
浸蝕・開始』

「本当に腹立たしいわね」

僕の魔術行使をジト田で見てくるのでその視線を気にせずに紅茶を啜り、遠坂凜の言葉に耳を傾ける。

「本来であれば、少しづつにしか込められない魔力をそんな簡単に短時間で注ぐなんて世の中の魔術師を馬鹿にしてるとか思えないわ」

本当にイライラした声色でそつと言つてくるので、ティーカップを机の上に置き言い返す

「僕はこれと『変化』しか使えないヘッポコ魔術師だぞ？それを五大元素使い（アベレージ・ワン）に羨まれるとは実に光榮だな」

それを聞いた遠坂凜は啞然としたような表情をした後に何故か納得したように頷き、小声で「だから桜の治癒は私にやらせたのね」などと言つていたので気にせずティーカップを取り紅茶を啜る。

何やら満足したような様子の遠坂凜を尻田に睨みつけた

「ああ人差し指がズレるなあ

「ぐつ」

遠坂凜はそれを聞き苦虫を噛み潰したような顔をして、こちらを睨んでくるので

「まさか人差し指を捩切られるなんて体験をするとは思っていなかつたな」

わざと聞こえるような大きさの声で呟くと、更にこちらを睨みつける視線は強くなり射殺さんばかりとなつたが相手をせず人差し指を摩る。

「しょうがないじゃない……ちゃんと説明しないアンタがいけないんでしようが……」

被害者が僕なのにも関わらず、遠坂凜は逆ギレして暴れ回っている。

あの後、気を失つてしまつた僕をベッドまで運んでくれたのはいいのだけれども、目が覚めるとすぐに先程のことについて説明するよう強制され、《変化》したばかりの人差し指を握られたのだが、無機物を有機物へと変える《変化》には時間が必要なので

さすがに『変化』直後で結合しきつていなかつた人差し指を握られたせいで人差し指は簡単に捩切られ、それを見た遠坂凜は興奮し取り乱して近くにあつた燭台で僕を殴りつけてきたのである。

そして、しばらく経ち漸く落ち着いたので『変化』についての説明をして冒頭に戻るわけだ。

「ハアハア・・・ハア・・・・」

暴れ疲れたのか肩で息をしている遠坂凜を紅茶を啜りながら見つめて

「お疲れ様」

若干馬鹿にしたニュアンスを込めてそう言つとこめかみをヒクヒクと動かし苛立ちをあらわにしてるのでからかうのをやめ、口を閉じる。

限界を見極めてからかうのが一番楽しいからなどと思つていてると遠坂凜が訝しげな眼差しでこちらを見てくるので視線の意味が分からず、首を傾げて尋ねる。

「どうした遠坂凜？痴呆か？」

もちろん多少の毒を入れることは忘れない。遠坂凜は再び「めかみをヒクヒクさせた後、深呼吸をしてから

「なんでフルネームで呼ぶのよ？」

と疑問を呈してきた。

むつ今までそんなこと考えたことなかったな。

無意識のうちにフルネームで人を呼んでいる自分について考えてみたが何も浮かばない。

「それがどうかしたのか？」

「いや付き合っての長い桜までフルネームで呼んでるからなんか理由があるのかなあ」と思つて

どうやら興味本位で聞いたようだが生憎こりりは答えを持ち合わせてはいないので、困った顔をしたながら

「むつ自分でも理由は分からん」

正直に答えると遠坂凜は頷きながら

「だったら凜つて呼びなさい」

ヒョウヒーベル。それに増長するように聞桐桜も

「私も桜でいいですよ」

と言つてきましたので多少困惑して

「いや別にフルネームでも「駄田よ、なんかムカツクから許さない」
ぬう

何故か強制されたので、しおりがなく

「ではうつか凜と親しみを込めて呼ぶ」といじつよつ。ああこの響き
は実に君にあつてゐる

からかうにとてしたら、遠坂凜は肩を震わせ俯き始めたので危険

を感じ「ンンン」と部屋から脱出しようとしたら

「あら、待ちなさいよ空山君」

とてもいい笑顔を浮かべた遠坂凜に肩を掴まれた。

「ぐつ外に空気を吸いに行つてくのー。」

逃げようとしたのだが笑顔を浮かべ万力のような力で肩を捕まれたまま

「そんないい感じに行きたいのなら行かせてあげるわよ・・・あの世にねーー。」

とつもなく重いボディーブローを喰らつた。

本日一度目の気絶である。

21話・弟子、海藻・・・・・探索をして必要なものを見つける。

一期一會

茶道に由来することわざで、『あなたとこつして出合つているこの時間は、一度と巡つては来ないたつた一度きりのものです。だから、この一瞬を大切に思い、今出来る最高のおもてなしをしましょう』と言つ意味の、千利休の茶道の筆頭の心得である。

平たく言えば、これからも何度でも会うことはあるだらうが、もしかしたら一度とは会えないかもしれないという覚悟で人には接しない、ということである。

利休の弟子である「宗」の『山上宗一記』に「一期に一度の会」とあり、ここから「一期一會」の語は広く使われるようになつた。

「一期」と「一會」をそれぞれ辿ると、「一期」は仏教用語で人が生まれてから死ぬまでの間を意味しており、「一會」は主に法要などでひとつ集まりや会合と意味であり、ともに仏教と関係の深い言葉なのだ。

後半は完全に蛇足だが何が言いたいかと言つと、どんな相手であれ人の出会いは大切だよねー的な今時の女子高生並に緩いことが言いたいわけではなく、一度以上会つことが確定している相手には杜撰な対応で構わないと言いたいのだ。

特に相手があまり興味や関心を得られる相手ではなければ、尚い

つをうそのことじが言えるだれ。

よつて今現在の僕の対応は間違いなんかじゃない！と声を大にして叫びたいのである。

「聞いているのか、空山？」

「…………間桐桜、舌が焼け切れるぐらい熱いお茶をく
れ」

「はい、分かりました」

「だからね、僕、間桐慎一は

「ふう…………。

「はい、どうぞ」

「つむ、感謝する間桐桜」「桜でいいですって」ぬうまだ慣れないから多めに見てくれ

「クスクス、はい」

柔らかくからかうように笑う間桐桜を始めたように半眼で睨みつけながら持ってきてもらつたお茶を啜る。

「ふう」

一息ついていると

「おい、分かったか空山僕の素晴らしさが？」

「・・・ぬつ！？なんだこれは！？」

「ああそれはカリン糖饅頭つて言つて「おいーー」あつ

楽しそうに笑顔を浮かべながら説明していた間桐桜が手に持つて
いるカリン糖饅頭を苛立ちげに奪い、頬張る・・・・・誰だ？

「おこお前」

「もぐつづまいな（ボソッ）・・・なんだい、空山？僕の偉大さが
よつやく分かったのかい？」

「お前誰だ？」

「つー？・・・お前僕の名前知らないのかよー？」

「いやどこかで聞いた記憶があるんだが・・・・・・」

「出だしで言つたよー僕の最初の台詞で言つてるからーー。」

「メタ発言は辞めろ、この作品だけはギャグではなくシリアルス重視
で行こうとしている作者の気持ちを考えろーー。」

「お前が一番メタ発言してるんだよつーー。」

何故か逆ギレされ怒鳴られたので、苛立ちげに舌打ちをする。

ちつ・・・うるさい不等毛植物門褐藻綱コンブ目チガイソ科ワカ
メ属ワカメ。英訳はHeterokontophyta Phaeophyceae Laminariales Alariaceae
Undaria U. pinnatifidaで学名U. pinnatifida (Harvey) Sur-

日本名「カメタ」

「なんでそんなこと覚えてんだよ！？嫌がらせのためにWikipedia覚えてきたとしか思えないんだけどーーー？」

「間桐桜、何を言つてるんだコイツは？さつきから何か言つてはる
のは分かるんだが、生憎僕は海藻語が分かるような残念なもとい高
尚な脳みその出来ではないのでな・・・ああ間桐桜も分からんよう
だな」

苦笑しながら、ちらを見ている間桐桜を見て厭らしげに口元を歪む。

「イツー?」

「つふふふ、見つかりましたか空山さん?」

微笑みながら尋ねてきた間桐桜に気まずげに手を逸らし、お茶を啜る。

「いやまだ探してすらいないぞ」

「なら早くお願ひしますね」

「あれ?僕の言葉聞こえてないの?・空山!・空山くん!・空山さん!?」

「すまん、今から探す『浸蝕・開始』^{ゲイン・オン}・・・見つけたぞ。ちつあんな場所に在ったとは・・・」

間桐桜に不手際を謝った後に床に手を置いて間桐家を『浸蝕』し、間桐臘硯しか知らない秘密の魔術工房を探る。

「どうにあつたんですか？」

「臓硯の部屋だ、隠し部屋になつてたみたいだな。くつ灯台元暗し
とほこのことか」

苛立だしげに顔を歪めながら、臓硯の部屋と向かう。
その後を静かについてくる間桐桜

「何を探してたんだ？」

「そこになら多分蟲の排出方法が書かれた魔術書があるはずだ」

「…………。」

顔を俯かせ、僕に表情が見えないよう隠す間桐桜を見てため息を
ついた後、頭に手を置き撫でるような手を動かす。

「……はあ。本来こんなことは僕のすることじゃないんだが……
……間桐桜、過去なんざどうでもいい。大事なのはこれからだ、
お前がどう考えどう動くかが大事なんだ。一概に過去がいらないと
は言わんが、過ぎ去ったものに想いを患つても手に入れられるもの
はないぞ」

「…………。はい」

頭を撫でられながら顔を俯かせ、静かに首を縦にふり僕の話を聞いてくれる。

やれやれ、こんなことは衛宮士郎がやるべきことなんだが……。
・くつ、やはり僕も衛宮菌に感染されたようだ

「あれ？ 何この空氣！？ というか僕の言葉、本当に通じてない！？
本当に僕、海藻語とか使つてたの！？」

間桐臘硯の部屋につき、扉を開けて隠し部屋のあるクローゼットまで行き扉を開け、更にその中にある隠し部屋の扉を開けて隠し部屋の中へと入る。

中に入ると凄まじい腐臭と嫌悪感を催す臭いが鼻を刺激し不快感を感じるなんらかの悪意が渦巻いていたが、気にせずに中へと足を進め部屋の真ん中辺りの床に再び手を置き《浸蝕》し、罠を解除していく

『^{ゲイン・オング}浸蝕・開始』

『^{ゲイン・アウエイク}操作・起動』

部屋の中には、すぐに入れなくなるか、潰してしまった方がいいぞ」
近寄り蟲の操作や生態について書かれた魔術書を見つけた後、振り返りもせずに部屋を出る。

「あの部屋はすぐに入れなくなるか、潰してしまった方がいいぞ」

「…………はい」

「なんでだ？」

部屋に入らずに外で待っていた間桐桜にそう告げると、間桐臘硯の部屋の扉に触れて

『^{ゲイン・オン}変化・開始』

扉を変化させ開かないように扉と壁を一体化させる。

「また今度来る時まであの部屋には入るな」

「分かりました、気をつけますね」

「おい、なんでだよー? なんで入っちゃいけないんだよー?」

「「「わるそこ（ですょ）」」ワカメ（兄さん）」」

「あすまんつて・・・・・・ワカメ兄さんつてなんだ!?」

ウダウダうるそこ間桐慎一を無視して間桐臘硯の部屋に踵を返してその場から去る。

あの隠し部屋には突き刺すような悪意が感じられた・・・まだ何かあるな。

そう推測し、なんの装備もなくあの部屋を搜索するのは危険だと感じたのである。

「まだわやあわやあ騒いでる間桐慎一を更に無視して居間へと向かう。

・・・・・この家を売り払った方がいいかも知れないな

やれやれ

自分のお人よしさに嘆息しながら、居間に置いてある温べなつた
お茶を飲む

「温べ・・・・・」

《続く》

22話・弟子、一期一會のはずが一戦一會

人間だもの

これ程素晴らしい言葉はないだろう。
自己を蔑むこともなく、自己を持って離しているわけでもなく、自己を何者でもない自己として表現していると言えよ。まさに、人間、

故にちょっとしたことでもウダウダと文句を言い、他人を責めていてはその人物の狭量が知れると言つものだ

そつは思わないか少年?」

「いえ、いきなり話を振られてもこちらとしては大いに困るんですが、お兄さん?」

僕の隣で疲れたように肩を下げている少年にそつ呼び掛けたが、何やら返答が冷たかった。

「つまり、人間はよく失敗をするから『にしちやダメダヨ』的な感じだ」

「そんな明るい口調で とか言われても無表情なんぞ更に対応に困りますね」

少年はやれやれと言わんばかりに肩を竦めて、こちらを見つめてくるので少しだけ責めるような目つきで見返し

「ふむ、先に攻撃してけたのは少年だったと思うのだが?」

それを聞き、こちらから皿を逸らしながら口元をむるよ

「うう……“人間だもの”ですよ、お兄さん」

「だよな少年」

「やつですね兄さん」

なあなあで和解することに成功した。わあて読者諸君が気になつてこるのでこの少年との出会いについて語るとしてよ。

季節は秋、葉に紅葉が混じり少し肌寒い季節となつていた。

僕、空山海人はここ最近間桐家に立ち寄り、魔術に関わるもの全て排除して回つているわけなんだが・・・・・鬱陶しかつた中間テストの初日が終わり、帰りに知り合いからの遊びの誘い全て断り、暇を持て余したついでに間桐家に向かっていた時だつた。

「ぐすつぐすつ」

泣きじやぐるような声が聞こえ、それと共に慰めるような泣き止ませよつとする声が聞こえたので暇つぶしにと思い、そちらに向かうと

木の下で小さな女の子が泣きじやぐり、それを横にいた買い物帰りなのかスーパーの袋をぶら下げた金髪の少年がどうにかしようとしていたのである。ふと、木を見上げ枝に風船が引っ掛かっている

ことが見えたので、状況を理解し暇つぶしがてら少年がビーツするかを見ることにした。

少年はどこからともなく出した飴やら玩具やらを女の子に差し出すが、女の子は見向きもせずただ泣きじゃくるばかりで、少年は困ったような顔をした後木を見上げて、枝に引っ掛けかっている風船を見ると嘆息した。

打つ手が尽きたと言わんばかりに頭を抱えて、泣きじゃくる女の子を見て更に困った表情を深くする。

もう特にすることもないだろうとその場から踵を返そうとしたら

「お兄ちゃん」

知らぬ間に近づいていた少年に裾を掴まれ、足を止められた。

いつの間に近づいたんだ？少年のすばやさに感心しつつも、少年と同じ視線の高さになるよう身体を屈めて無表情で少年に問い掛け る。

「どうした少年？」

少年は頬みじむように木の上にある風船を取つて欲しいと必死にお願いしてきたので、了承し木の幹を蹴り風船があるところまで躍し、風船の紐を掴み女子へと渡した。

「あつがとう。」

女子は風船を渡した僕に対してもお礼を述べてきたので、僕は首を横にふり

「そこの少年が頼んだから風船を取つたに過ぎない、お礼なら少年に言つとこ。」

今まで必死に女子を慰めていた少年の方を指差してやつと
女子は笑顔を浮かべて、少年にお礼を言つていた。

「やめ」とも終わつたので、その場から去りつとすると再び少年こ
とで、裾を掴まれ引き止められる。

振り返り裾を掴んでいる少年を見据えて何用か尋ねると

「いえ僕から風船を取ってくれたお礼を言ひてなかつたので、お礼を述べよつと思いまして……ありがとひびきましたお兄さん」

少年は「」と笑顔を浮かべ頭を下げてきたので

「気にするな」

そう言つて今度こそ去ろうとしたのだが、少年がいまだに裾を掴んでいるのでその場から動けずになっている。嘆息するように少年を見て半眼で

「まだ何か用なのが、少年？」

尋ねると少年は困ったように首を傾げて

「いえ止める気はなかつたんですが……風船の借りがありますからね。お兄さんポケットにあるものを出してください」

ぶつぶつと呟きながらも催促してきたので、少年の言動が分からず首を傾げると

「何か良くないものを持ってますよ」

インチキ占い師のよつな」とを言われたので、口を開めて尋ねた。

「良くないものとは?」

少年は笑顔を浮かべたままどこか胡散臭い口付きた

「良くないものとは良くないものです」

とか言つてたので、右ポケットに入っていた陶器のカケラを取り出し少年に見せると少年は愕然とした表情をして目を見開き

「それでお兄さん……早く捨てるから処分して下さい」

急に顔色を変え、迫ってきたので少年の頭を押して近寄れないようこした上で

「ほう少年…………これが良くないものと分かるのか？」

無表情ながら探るような眼差しを少年に送る。

「これは何かは分からんが、録でもないものであるということは知つていてる。なんせ知り合いの女の心臓に埋まつてたものだからなうだな。

カケラを弄びながら少年を見る。

間桐桜の心臓を触った際に、異物が入り込んでいるのを感じて取り出しておいたんだが…………何かは分からぬが正解だつたようだな。

一人で納得して無言を貫いている少年を見据えて

「少年は魔術師か？」

話の中心を尋ねると少年は顔をあげ、敵を見よつた眼差しを向けてくる。
ちつ失敗した。

「くつお兄さんは魔術師だつたんですか！？迂闊でした！」

少年が買物袋を持っていた右腕を振り上げると、少年の背後にある空間が歪み、そこから飛び出してきた大量の魔力を内包した数多の種類の武器の先端がこちらに向かられる。

あまりの馬鹿げた光景に多少驚き、無言でいると何を勘違いしたのか少年がこちらに向かつて武器を射出してきた。

急な攻撃に驚きながらも、それをかわして次弾として迫つてくる更なる武器を一番最初に飛んできた武器で迎撃し弾く

『^{ゲイン・オン} 浸蝕・開始』

武器を『浸蝕』により制御し、内包された魔力を遺憾無く発揮して迫りくる武器を弾き続ける。

「手癖の悪いお兄さんですね！」

少年は苛立たしげに顔を歪め、更に苛烈に武器を射出してくれたので

「のままでは串刺しがれると思い、今まさに射出せんつゝしてこの剣に狙いを定め
これから飛んできた瞬間に持っていた剣で少年の方へと弾を飛ばした。

弾を飛ばされた剣は狙い通り少年の方へと飛んでいた、少年が怯んだ隙に間合こをつめようとしたのだが

その田舎見は甘く、少年は決して怯まずに泰然と立ち続けて・・・

少年の持っていた置物袋に剣が突き刺さった。

「ああ～！？」

それを見た少年は悲しげな声をあげて、その場に崩れ落ち因つた

這いになつた。

そして小さな声で「これであの地獄麻婆生活から脱出出来るはずだつたのに・・・」と武器の射出も止め、本当に悲しそうな顔をしている。

四つん這いの少年に攻撃するわけにもいかず、とつあえず泣きやうな少年に謝り、慰めて

冒頭に至るわけだ。

まあ確かに弾き返した僕にも責任はあるが、勘違いというつかりで攻撃してきた少年も少年だな

喧嘩両成敗という奴か？

「つむ、やうしょう」

「何を納得してるんですか？・・・それよつじ飯どりしょう

悲しげな顔をしている少年を見て、ため息をつき食材を台なしにしてしまったお詫びにじょうがなく衛宮家へと連れていこうとした。

ああ・・・・・まあならんな

《続く》

23話・弟子、少年と知り合いになり餌付けに成功する

しうがなく、衛宮邸へと連れ帰り衛宮士郎にとりあえず拾つてきたと言つたら國家権力に電話されそうになり、面倒ながらも色々あつて少年の食材を台なしにしてしまつたのでお詫びに食事を「ご馳走することにしたと告げると「分かつた」と簡単に了承され、家へとあがつた。

蛇足ではあるがあの後、少年の餌付けに成功し少年が衛宮家に入り浸るよつになる。

ちなみに少年の名前はギルガメッシュと言つらしいが・・・。なんとまあ少年の親は歴史が大好きな人物なのであろうか、それでも最近の子供みたいな超海スカイとか言つ名前をつけられなくてよかつたと言つたら苦笑いをしていた。

食事も終わり、腹ごなしに少年とゲームを対戦することになった。

P-2の運命／無限記号というゲームなのだが、最初このゲームをやる際に「ちよつだーめーつーこれはこの世界に在っちゃいけないもんだからー！色々駄目だからー」とか言ひ変な電波に禁止を促されたが無視をしてゲームを始める。

少年はやつたことがあるのか金ぴかの雑種、雑種うるさいキャラを固定で使つてるので、やつたことのない僕は適当にキャラを変えながらゲームを楽しんでいる。

今僕は袖のないドレスを着た金髪クルクルドリルの女の子を操っているのだが、お嬢様なのにルチャリブレ（メキシコのプロレス）を得意としているという、なんともはちゃめちゃなキャラである。

必殺技がジャイアントスイングとは・・・・・・よくそれで下着が見えないな。

このゲームの不思議なところは乳揺れまで再現されているところで、正直こだわり過ぎじゃないだろうかと思わなくもないがこういうのが一部の客層に人気があるのだろうと思い、何も言わないうつにした。

というか突っ込んだら何か大切なものが消されそうな気がするので、何も言わなのが人間として正しい生き方なのである。

互いにゲームに嵌まってしまったせいか、少年が帰るにしては随分と遅い時間になってしまった。

「少年、遅い時間だから先に親御さんに電話しておけ」

一旦ゲームを止めて少年を帰す前に、先に遅くなった理由を親御さんに言つた方がいいと思い、そう促したら少年は「コニコニ」と笑いながら

「今日は家に親がいないんで電話しなくても大丈夫ですよ」と言つてきたので、それにお人よしが反応した。

「ならウチに泊まつていけよ」

生つ粹のお人よしである衛富士郎にとつて少年一人が家にいると
いう状況は赦せないらしく、帰ろうとしていた少年を引き止めた。

少年はあからさまにうぶたえながら断つとしているのだが、衛富士郎は頑として帰すことを許さうとしない。

少年がこちらに助けを求めるような視線を送ってきたが、それに 対して首を横にふり口パクで「諦めろ」と云ふると

肩を落として渋々衛宮士郎の提案を了承していた。

こうなった衛宮士郎に抵抗することは無駄でしかないので早々に 諦めるしかないのだ。ただのお人よしかと思つたらうやつたいた程頑 固なのでどうしようもない時があるのであるのだ。

結局、少年は衛宮邸に泊まることになり、何故か少年と一緒にお 風呂に入ることになった。よく分からぬが少年は裸の付き合こと いつもをしてみたいらしい。

多少、少年の性癖を疑つたが少年の自己報告によつ、その疑いは 消えた。

少し身体を流した後に少年と一緒にお風呂に入つてみると少年が 僕の身体を凝視していることに気がつく

「少年・・・・やはり少年は両刀遣いだったようだな」

田を細めながら少年から距離をとると、それを見た少年はアタフタしながら

「いや違いますよーー！ただお兄さんの身体は傷が多いなと思つて見てただけですよーー？」

と弁解してきたので結局は人の身体を覗姦していたことに気づき再び少年から距離をとる。

「ああお兄さん！？距離を取らないで下をこよーー！」

また少年が慌てていたので、からかうのも飽きたのでしょうがなく元の位置に戻る。

「でお兄さんはどうしてそんなに傷があるんですか？」

少年は純粹な興味本位で僕の身体中にある傷を指差し、やう尋ねてきたので遠い田をしながら

「まあ色々あつたんだ」とぼかして答えた。

正直思い出したくもない。恐竜みたいな生き物と刀一本だけで戦わされたりとか、丸田並に太い腕を6本も持ったゴリラみたいな奴とか身体が液体みたいになる奴とかダイヤモンド並に身体が硬い奴とか一振りで山を掻き消す片腕の人間とかと半死半生になってまで戦わされて・・・・あああと本に乗ってる英雄みたいな奴と戦わされたこともあったな

昔を思い出してみると僕を憐れみを込めた表情で見つめている少年に気づく

しうるないので、この話を終えて身体を洗うこととしたのだが、鼻につく匂いがしたので鼻を鳴らしながら匂いを嗅ぐ

「赤唐辛子と花椒に豆板醤か？」

嗅いだことのある匂いを並べると口に出すと

「ひつー？」

少年が怯えるように声をあげ、身体を震わせているのを不思議に思い、今の香辛料で出来る料理を思い浮かべて口に出す。

「麻婆豆腐か・・・」

「ひいいい！？」

少年は麻婆豆腐という言葉を聞いた瞬間、パブロフの犬のようにならに恐怖で身体を震わせている。

そんな少年を見て何故か昔会ったカレーを主食でありおかずであり飲み物ですらあると言つて憚らないカレー司祭を思い出した。

そういうえば教会に拉致された時（カレー司祭に香辛料を取りに行くのに付き合わされた）にカレー司祭とカレーと麻婆のどちらが優れているか争つてるオッサンがいたことを思い出す。

少年の家が教会だとは聞いていたが、まさか・・・な。あまり当たつて欲しくない現実を否定するために首を横にふり、いまだ怯えている少年と共に身体を洗い風呂場から出て身体を拭き服を着て少年と共に居間へと向かう。衛富士郎に先に風呂をいただいた旨を告げ、今度は「繋がる心が俺の力だ！」という言葉が好きなツンツンの少年が主人公のゲームを始める。少年が操るのを僕が横でアドバイスを出しながら進めていくという感じである。

多少連打ゲーのところがあるが、別にストーリー 자체は嫌いではないのでなんの抵抗もなくやり進めていく

少年がボタンを連打し敵を攻撃しているのを横目で見つつの前やつた時に最初の島でどこに行つていいか分からず、一時間ぐらい迷いその間に敵にボロボロにされたのを思い出し多少気が滅入りながらも少年に指示を出していく

何時間か経ちキリがよくなつたところですっかり返すのを忘れていた少年から奪い、《浸蝕》して使用していた剣を少年へと差し出す。

すると少年は困つたように頭を搔きながら

「それはお兄さんにおきます」

と笑顔で言つてきた。何やら《浸蝕》されたのが少年的には気に入らないらしく、更に風船の借りを返したいらしい。

別に断ることもないのと遠慮なくいただいておいた。

・・・・・空山海人は剣を手に入れた！

まあお約束という奴だ。

『続く』

24話・弟子、装備を手に入れた！・・・but (前書き)

どうも初めまして 鑄々 です

・・・・・ 何人かは・・・といか読んでる人は気づいたかもしだせんが

鑄々 を矢印の方向から読むと
ツバツバ

バツバツ

×
×

というこんなくだらないお話です
どうも改めまして ××です

知らない方は初めまして
くだらないギャグを書かせていただいている ××と申します

今回ギャグ方面からの脱出を謀り名前も変えて心を一新させて挑ん

だですが・・・・・無理でしたね。r n

どなんじん、ギャグが前面に出はじめといつ・・・・・・・・・××クオリテ
イー

今日は短いですが

誤字脱字は報告お願いします

魔剣ティルヴィング

オーディンの血を引く王、スヴァーフルラーメがドヴァーリン、ドウリンという二人のドワーフを捕らえ、命を救うのと引き換えに黄金の柄で鋸びることなく鉄をも容易く切り、狙つたものは外さない剣を作るよう命じた。

ドワーフたちはこの要求を飲み剣を鍛えたが、彼らは去り際に、この剣が悪しき望みを3度は叶えるが持ち主にも破滅をもたらす呪いをかけたことを明かし、岩の中へ逃げ込んだ。

そしてスヴァーフルラーメはティルヴィングを携え戦場におもむき勝利し続けた。

しかしアルングリムという男と戦つたときに剣を奪われ、この剣で刺されて命を落とした。その後アルングリムの息子アンガンチュールに受け継がれたが持ち主や近親者がこの剣により死んだ。

・・・・・人に渡す剣じゃねえな。

少年曰く、原典だから威力は変わりませんが呪いはありませんとのこと。

うん、まったく信用出来ない。無表情で冷たい眼差しを送りつづ

けないと少年は目を逸らして

「…………多分」

と不確定要素を付けてきた、まあそれでも宝具自体の力を引き出す真名解放をしない限りは大丈夫らしい。まったく信用出来ないが・・・・・

実のところ欲を言つてしまえば、剣ではなく刀を・・・それも一振り欲しかつた。一応一刀でも扱えることは扱えるが、二刀には劣るし更に刀と剣の扱いは全く違つのだ。

刀は流れるように引きながら斬るのに対して、剣は爆発するような力で押し切るのである。使えないといつことはないが、多少残念である。

そんなことを考えながら剣を見つめていると、何を思ったか少年が変な腕輪を差し出してきた。

「これは？」

「よく考えたら、今の時代ではそのまま持ち運べませんでした。そ

れは持ち運ぶための道具です」

そう言つて少年は腕輪と剣を僕から借りて、右腕に腕輪を付けて剣を握つて「Cooaa!」といながら剣を振るつと剣が姿を消した。

今度は「ギフト」と言ひながら腕輪を付けた右腕を振るつとその腕に剣が握られていた。

「なんだその腕輪?」

不思議に思いそう尋ねたら少年は「Cooaa!」しながら

「聖ニコラウスの袋です」とかおぼれきになられた。

聖ニコラウス

4世紀頃の東ローマ帝国小アジアの司教、キリスト教の教父聖ニコラオスであり、以下の電説のほかに、無実の罪に問われた死刑囚を救つた聖伝も伝えられている。

その伝説とは、ある日ニコラウスは、貧しさのあまり、三人の娘を嫁がせる」との出来ない家の存在を知つた。

「コラウスは真夜中にその家を訪れ、屋根の上有る煙突から金貨を投げ入れる。このとき暖炉には靴下が下げられていたため、金貨は靴下の中に入っていたといつ。

「この金貨のおかげで娘の身売りを避けられたといつ逸話が残されている。靴下の中にプレゼントを入れる風習も、ここから来ている。

要はサンタクロースの袋といつことだ。勿論原典のこと……こんなものを持ってたら子供たちが夢を壊され涙目だといつと無表情ながらもそんなことを思いつつありがとく頂戴した。

別に呪文を言わなくても取り出したいと思えば取り出せるし、仕舞いたいと思えば仕舞えること。ちなみにけつとした小物なら魔力を消費すれば生み出せるらしい……本当に子供の夢を壊す道具だな。

こんなものを持っている少年の正体について気にはなったが、正直どうでもいい。少年がなんであれ少年であることに変わりはない、それがあまり厄介事に首を突っ込みたくないのだ。

「この冬木市はかなり密度の高い靈地でしかも魔力が歪んでいるので、明らかに何かあるのは目に見えているが口に出すわけもなく

余計なことは言わずに現実逃避するかの”とく早速腕輪を使用し、貰った剣を腕輪の中に収納し何本か作つてあつた刀も収納しておいた。

備えあれば憂いなしといつ奴である。念のためにいゝ子は知っちゃいけない金属も収納しとおいたが一応である。

そんなこんなで一旦少年と別れて部屋に戻り、少年から貰ったものを早速試していると、不意に背後から恐ろしい寒気がした。

「はつーー？」

すぐに振り向くが既に遅く、目の前にはこん棒みたいなトラウマ量産機、通称宝石剣を携えた爺さん（キシュア・ゼルレッチ・シュバインオーグ）が二コニコとこちらを笑顔で見ていた。

今まで何時もあの笑顔を見てきたがアレを浮かべている時は總体して録なことに合わない、といつか基本的に異世界に飛ばされる。

「へつ厄日かーー？」

思わず悪態をつきながら「笑顔の爺さんから離れよう」としたが既に遅く、トライウマ量産機は振るわれていた。

・・・・・ 今ほどサンタクロースに願つたことはない。安らかな
幸せをください。

《続く》

驚天動地

意味はそのままで、天を驚かし地を動かすことつまり、大変世間を驚かすことである。

これは中唐（八世紀半ば）の詩人白居易（字は樂天、号は香山）が、「詩仙」と呼ばれた盛唐（八世紀初頭）の詩人である李白（字は太白）の墓を詠でた時に作られた「李白墓」という詩が出展である。

まあいつも通りの下らないウンチクから始まるわけだが、今まさに他人から見たら僕にとつての驚天動地の事件が発生したわけではあるが・・・・・正直な話もつ慣れたせいいかこの程度では驚きはない。

むしろああまたかと言つた諦観を込めた感情が先に来てしまう。

まあ簡単に何が言いたいかと言えば・・・

「爺さん…………死なないかな」

呟くように平淡な声で無表情に悪態をついてみた。
すると、なんとことりことだらうか・・・

「誰が死ぬんじゃ？」

いつもなら飛ばして田的も告げずに放置していくのに、珍しく爺
さんがついてきている。
きっと今日は槍とか降るんだろうな・・・・・まあ槍程度じゃ驚
かないが。

頭上に戦艦が落ちてきたことがあるので、何が降ろうと驚かない
自信がある・・・・・・欲しくもない耐性を手に入れたもの
だ。

「落ち着いているのはいいんじゃが・・・・・・周りを確認したの
か？」

「当たり前だ・・・・・・こんな空在つてたまるか」

トンネルを抜けたらそこは・・・・・・歪んだ空のある町でしたマ
ル・・・・・笑えないな。

なんなんだこの空は？

歪んでる上に升田みたいなものまであるとせ……

「……」は『鏡世界』無限に連なる會わせ鏡のようであつたひの鏡回廊の世界の中で唯一の鏡面そのものと言える世界じゃ……・・・・・簡単と言えばじやが。まあ詳しく言つてもお前さんは聞も流しちゃう

course

あまり威張つて言えることではないが鏡面界なんていう平行世界の概念を越えた一次元上の世界の話など聞きたくもなかつた。

「で何をすればいいんだ？」

珍しくテバつていいところとは結構危ないから先に説明だけしていやうう的な爺さんの雀の涙程の唯一の優しさであるまい。

「何か失礼なことを思われた気がするんじゃが、それは一日おいておいて……」

歳の割には勘が鋭いのが爺さんの厄介な点の一つだな、早く耄碌もうりゅくすればいいのに……

内心愚痴りながら爺さんの説明を聞く

「お前さんにして欲しいのはカード集めじゃ」

「髪のモシンシンの決闘好きな青年に神のカードでも集めてもらいたい

「べもなく切り捨てたが、トラウマ量産機（宝石剣）をひりつかされたのでおとなしく口を開じる。

「Jの冬木の地には膨大な魔力の通る靈脈が通つてある・・・冬木と言つても先程お前さんがいた冬木とは違う場所じゃが」

お得意の第2魔法か・・・

「お前さんのいた冬木には溜まった魔力を発散させる装置があつたのじゃが、これからお前さんが行く冬木には魔力を発散させる装置がなく・・・ある口溜まつた魔力が物質化し力を持つて世界に現界した。

それがお前さんに集めて欲しい『クラスカード』と言われる英靈の力を宿したカードじゃ・・・英靈はこの鏡面界において実体化しておるから、それを倒してカードを手に入れろ」

「帰るわ・・・やつぱり歳だつたんだな爺さん。人間が英靈に勝てるわけがないだろうが」

あまりにもぶつ飛んだ発言にすぐに踵を帰し元の世界に帰すよう促したが・・・

爺さんのニヤニヤ笑顔を見て嘘でも冗談でもないと知った。
実は最初から諦めてたけどな！！

心の中で爺さんに対する厭味を唱えなる。

「むひそらひるじやな」

不意に爺さんが歪んだ町の真ん中を睨み始めたので、そちらを見ると歪んだ世界の真ん中に穴が空きそこから某テレビから出てくる人ばかりに何かが這い出でた。

「あれが英靈じや・・・まあ黒化されて理性を失つているようじやが」

爺さんは呑気に「穴から這い出てきた紅い鎧の上に黒い外套を羽織つた赤銅色の肌の白髪の偉丈夫を指差している。

「ガアアアアアアアアアアー――――――」

明らかに戦闘体勢だったので、じょつがなく聖一カラウスの腕輪を振り、起源刀・形無しを取り出す。

僕が武器を構えると同時にいつの間にか持ってきた黑白の双剣で躊躇いもなく切り掛かってくる。

黒い中華剣を右手の刀で弾き、追撃するよつに振るわれていた白い中華剣を左手の刀で弾く

嵐のような凄まじい剣撃ではあるが、その剣閃には武蔵師匠のような鋭さは感じられず・・・・僕と同じ非才の剣であることが垣間見えた。英靈に昇華したはずのこの人物がこんな粗末な戦い方をする筈がないと分かる。

「ガアアアアアアアア――――――――――――――――――――

「ふうつ――――――――――――――――――――――

本来この人物の戦い方は一から十まで全て綿密に練られた戦いのための剣なのである。

理性を失ったこの状態では、まだ武蔵師匠の相手の方が面倒である・・・・まあおそらく何か切り札があるのであるのだろう。後ろにいる爺さんが油断なく宝石剣を構えていることからそう推測できる。

い。何合も刀と剣をぶつけ合うが互いに非才な身、故に決着はつかな

・・・・・ どちらかというと経験の差で僕が押されている。剣からは異様な魔力が感じられたが、起源刀により『折れる』ことを『否定』しているので武器破壊されることはないが、このままじゃ必ず切り伏せられ負けるだろう。

「せいっ！」

それが分かったのか爺さんは僕にアイコントラクトで退がるよう命令してきたので、巻き込まれてはたまらないので無理を冒して相対していた男を蹴り飛ばし距離を取る。

そして、距離が開いた瞬間に男に轟くような咆哮と共に虹色の魔力の斬撃というか無限のように続く波が襲い掛かる。

明らかにオーバーキルだった。

確認するまでもなく、その場から男の魔力は感じられず。男がいたであろう場所には弓を引く男が描かれた古めかしいタロットカードのような物が落ちている。

あれが恐らく爺さんの言っていた『クラスカード』といつ奴なのであらう。

地面に落ちていたアーチャーと書かれた『クラスカード』を拾い、爺さんに見せようと振り向くがもはやそこに姿はなく・・・・。

鏡面界が崩れ始めた。

多分英靈の消滅と共に現れていた鏡面界も消えるのであらうと香氣に推測しつつ落丁していく

鏡面界が崩れるということは何処とも知れない平行世界に強制的に飛ばされるところわけで・・・・。

この場から無事に脱出するには第2魔法が必要なわけだが、僕がそんなものを覚えているわけもなく

何故か爺さんの笑い声が頭に響いた。

・・・・早くボケる

何處とも知れない世界へと飛ばされた。

《続く》

魔法少女

日本のサブカルチャーにおけるキャラクター^{ストックキャラクター}類型の一つ。

魔法などの不思議な力を使い、騒動を巻き起こしたり事件を解決したりする。

魔女つ子（まじょつこ、魔女つ娘）とも言われたりする。

また最大公約数的な定義をすると、

少女（成人前の女性）であること。

超常現象を引き起こす能力を持つていてこと。

その能力、もしくは引き起こされた超常現象を、作品本編中において「魔法」と呼称していること。

以上三条件を満たす者を狭義の魔法少女といつ。なお、ここでいう少女とは容姿の上での年齢である。

その魔法少女が人間以外の長命の種族である場合、暦年齢が人間の成人年齢を大きく上回っている例もある。

また、ここでいう魔法は、神秘性（その世界観において、通常の理論・認識の外に存在する）や特権性（一般の人間には使えない）を

有するものであり、非日常的で不思議な存在として描かれる。

このためハイ・ファンタジー作品に登場する職業的魔法使いの少女たちを「魔法少女」と認めない意見もある。

こうした世界観においては、魔法は科学の対象となり習得可能なものとして確立されている。

しかしそれは単なる技術であり、もはや不思議なものとは言えない。

こうした神秘性や特権性などが損なわれた魔法では、物語上「非常」としての機能を果たせないのである。

また、上記二条件のうち、二番目の条件を満たさなくとも慣例的に魔法少女と呼ばれる者もいるらしい。

さて何故僕がこんな愚かなことを考えているかと言つと

目の前にいい歳こいてヒラヒラの服を着て杖を振りましている知人を見たためである。

驚きのあまり思わず「写メを撮つてしまつたのは僕が現代に染まつてきた証拠と言えよ!」。

▼i▼a 現代っ子。

何枚も撮り続け、いい感じに枚数が貯まつたのでよつやく衛宮士

郎や間桐桜に送信しようとしたのだが並行世界かも知れないということを思い出し、データフォルダーに保存した。勿論パスワード付きの場所に入れコピーをとつたことは言つしまでもないだろう。

少し遠くの上空で何やらもう一人の魔法少女（笑）と争っているのを《浸蝕》により無理矢理《強化》した目で確認した上で、もう一度写メを撮り直しておいた。もう一人の魔法少女（笑）も撮影するためである。

ちなみに撮影の際はちゃんと《浸蝕》によりカメラの望遠を《強化》しているのだが、最初に撮った際には意識せず無意識に《浸蝕》を使っていたようだ・・・・・おやひしきかな現代っ子と言つたところであろうか？

怖いものみたさというか好奇心というか・・・

まあともかくにも、あんな魔法少女（笑）な遠坂凜の写真が撮れたので満足だな。

飽きたので携帯をポケットに仕舞い、何も見ていなかつたと言わんばかりに上空で争っている魔法少女（笑）を無視して町の情報を集めようと歩き出し、不意に上空からの激突音が止んだことに気づく

一応認識阻害と消音の魔術を使用していたのであらうが、魔術の抵抗力の高い僕には効いていなかつたのですぐに一人を感知出来たのだが・・・・・何があつた？

今更認識阻害等の魔術が効くようなことはないので、何があつたか確認のために上空を見るとヒラヒラの魔法少女（笑）の服が解け、紐なしバンジーを敢行している一人組がいる。

ふむ、こちらの遠坂凛は変わつた趣味を持っていたようだな。そう結論づけ上空から喚き散らしながら降つてくる一人組を無視して足を進める。

「ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、
ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、
ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、
ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、
ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘、ロリツ娘！
！」

すると犯罪めいた単語を呴きながら上空から流星の「！」とく降つて

くる魔法少女（笑）の装備であろう羽根が生え、丸い円の部分の中に五芒星がある杖を目視した。

本心としては関わりたくないのだが、あの杖から感じた覚えのある嫌な魔力の残滓を感じたのでもしかしたら事態が好転するかもしれないと推測し

『ゲイン・オン
変化・開始』

下半身の筋肉を変化させ、強化し上空にある杖へと肉薄し杖円の中にある星の部分を掴む。

「ふらはむつ！？」

この状況に追い込まれた元凶の魔力の残滓だったので、つい力が籠つてしまつたがあまり気にしてはいない。

「イタタタタッ！？誰か知りませんが潰れます！！ルビーちゃんの大事な部分がーーっ！！」

「そいつー！」

なんなくいらっしゃったので、着地すると同時に杖の端を持ち地面にたたき付けた。

「痛いです！誰だか知りませんが無防備にルビーチャンを持つとは愚かな！」

「むつー！？」

胡散臭い杖から僕を操ろうとする嫌な魔力の流れを感じたので

『^{ゲイン・オン} 浸蝕・開始』

「えつー！？」

杖から流れてきた魔力を『浸蝕』し、無害なものへと『変化』させ自分の体内へと吸収していく

何やら杖が驚きの声をあげていたが気にせずに、今度は杖自身を支配下に置こうとしたのだが

「むっちゃりますね！ですがこのルビーちゃんをナメてはいけませんよ！魔力・全・開！」

急激に流れてくる魔力が増加したので、体内へと吸収せずに《浸蝕》を行使するための魔力へと《変化》させる。

つまりこの杖から流れでる魔力を元に魔術を行使し続けているわけだ。

「僕相手に《浸蝕》で競おうなんて・・・身の程知らずだな」

莫大な魔力で力付くで《浸蝕》しようとしてきたので、それを受け流しその力で杖を飲み込もうとする。

他の魔術に関してはヘッポコだから《変化》と《浸蝕》にかけてはスペシャリスト・・・・いや異端者と言える。そんな僕相手に《浸蝕》で戦いを挑むとは・・・

「あつ！？結構ヤバめですね！」

杖も自分が《浸蝕》されかけていることに気づき、自分の敗色を

感じて逃げようとするものの既に3分の1を支配下に置いたので今更逃げられるわけもなく

「ああ～ムリっぽいですね～」

急に抵抗を止めたので、それに合わせて《浸蝕》を止め、杖を離して向かい合ひ。

傍から見たらかなりシユールな光景だが、あまり気にしてはいけない。

よつやく落ち着いて話が出来るよつになつたので、先程《浸蝕》して得た情報を元に話し掛けたみた。

「お前は爺・・・キシュア・ゼルレッチ・シユバインオーグが作つた愉快型礼装カレイドステッキに間違いないか?」

「ええルビーちゃんはあのクソジジイに作られた素敵に無敵なステ

ツキですよ～

クルクルと回りながら楽しそうに質問に答えたので、あまり気にせずには質問を続けていき

「実は」と言つわけどここにこいる訳なんだが・・・・・

・

杖に相談するといふこれから的人生で一度とありそうもない珍妙な体験をしつつも、今までの事情を杖に話した。

「成る程、アナタもクラスカード集めを命じられたわけですか？」

「アナタも？」

杖の呴きが氣にかかり尋ねると

「ええ私たちもクソジジイにクラスカードの回収を命じられたんですよ～」

アハ～と言ひながら顔もないのに笑いかけてくるステッキ。

「やうか・・・・でお前のマスターは？」

「いえ～リンさんはリンさんで面白いんですが、ちょっと歳くつち
やつてますからね～ロツチ娘が欲しいですよ～」

「どうやら遠坂凜からマスターを変えたようである。だから紐なし
バンジーをしていたのかと納得し

「ふむ、では新しいマスターが出来たら協力するか？」

「ええ喜んで～いい感じのロツチ娘じゃなきゃダメですよ～？」

クルクルと楽しそうに回りつづける変態ステッキを無視してステッ
キを引き連れ歩き回つてると、不意に変態ステッキが

「はつ、炉氣が！？」

後で聞いた話だが、炉氣といつのは口リツ娘が発するオーラのこ
とらじい・・・・・・聞きたくもなかつたが

「あそ」からレンレンをまかよー」

羽根の先をとある家のへと向けながら一緒に来るよつ急かすので、
多少面倒になり

「先に行つて」

「ヒヤッフーーーーーーーー」

杖をジャイアントスイングの要領で家の方へと投げた。

その後

「もっふつーー？」

変な奇声が聞こえたので、ゆっくりと変態ステッキを投げ入れた家へと向かい

何とは無しに家の表札を見て、塀の上から家の中を見て犠牲者を引き連れてくるまで静かに待つてしようと通過しようとしたのだが・・・

「ああ？」

思わず声が出てしまひとぞ馬鹿馬鹿しい光景を叩撃してしまった。

まさか衛宮士郎のフルチンを叩撃する」と云ふことは・・・

何とは無しに塀の上から見てしまったのは変態ステッキが銀髪の女の子に衛宮士郎のアレを見せている場面で

「・・・・・嫌なものみたな」

本当に嫌そうなものを見たように呟きながら変態ステッキが選んだ犠牲者もとい新しい魔法少女（笑）が出てくるのを堀によりかかって待つていると・・・・・

般若のような表情をしながら肩を怒らせ激怒している遠坂凜がこちらへと向かってくる。

どうやら変態ステッキが発している魔力を辿つてこちらまできた
ようなのだが・・・・・あまりお近づきになりたくない表情をし
ていたので嫌味も何も言わずに、遠坂凜が当たり前のように塀を越
えて、不法侵入するのを見送つた。

とりあえず犠牲者が出てくるのを待つことを止め、その場から離れる。あんな精神状態の遠坂凜の近くにいたら確実に怒りの矛先は多少なりともこちらへと向かってるのは目に見えてくる。

ようは巻き込まれたくない一心で変態ステッキを犠牲にして、その場を後にした。

一応もう一度ここに来られるよう表札に書いてあったアインツベルンといつも前とこの場所を記憶しておくれ

やれやれどこの世界の衛富士郎も女難だな

と他人事のように考へながら野宿するために公園へと向かう。

どうなつたら女の子と一緒にお風呂に入るという状況になるかは分からぬが、ナチュラルボーン主人公な衛富士郎にはそれぐらい造作もないことなのであるづ。

ぐだらない」とを考えながら公園にあるベンチに横になつていると

「あらあら面白い駄犬がいるわね」

なんか知らないが物凄い暴言を吐かれたので、起き上がり声が聞こえた方を見ると

「…………汚らわしい田で見つめないでくれるかしら」

とてもいい笑顔で毒を吐く銀髪を後ろで纏めた女性が立っていた。

「犬の分際で人間を視姦するなんていい度胸ね」

言葉を返さないうちにさらなる毒を吐かれ続けたので、しうがなく

「失礼あまりにも貴女が美しかつたもので」

衛宮士郎風といつかざりそのヒモのようにてキトーに流そつとし

たのだが、それを聞いた瞬間に女性は更に笑顔を深め

いじめっ子のようなサディスティックな笑みを浮かべつつ

「犬風情に褒められても嬉しくはないけれど、これでも私は心優しい保健医なのよ？特別に施しをあげるわ」

いつの間にか持っていた赤い布で僕を縛りあげ、どこかへと引きずつていく

絶対保健医とか関係なと思いつつも不様に連れられている。

布に縛られているせいで視界は暗く、引きずられているせいか先程から地面との摩擦が地味に痛い。

ちなみに僕に拒否権とか言葉を発する暇もなく

異様に手際がよいのだ

・・・・・・・・・普通に犯罪ではないだろうか？

修正中でござります

スランプの極致に立たされている今

なんら文章が浮かんでこないので、とりあえず指摘された点を修正しながら文章を増量中であります。

もはやシリアルは諦めたので、ギャグを最初から入れ始めました。
気が向いたらお読みください。

ちなみにリリカルとかゼロ魔については全然更新出来ません。

リリカルもゼロ魔も1000字ほど書いて挫折しました。

ゼロ魔はともかくリリカルはA-s編の最後まで構想は練れてはいるものの全く肉付きが出来ないといつ

ほら吹きな作者としては最悪な状況ですね。

ではまた今度（・・）ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7161n/>

魔法使いのテキトーな弟子

2010年11月9日23時25分発行